

第
二
種

三十三間堂棟由來

平太郎住家の段

平太郎は北面の武士、横曾根次官光當の子なり。光當弓矢の争より武者所時澄といふ者の爲に討たれ、其の仇を報せんとて暫く母の里常陸に退きしが、五年以前願望ありて此の紀の國に來り、三所權現に祈誓す。さて此の熊野山中に年ふる柳の大木あり。或る日季仲(源義親が謀叛の方人なりといふもの鷹狩)に來り、鷹の足尾この大木にかゝり將にこの木を伐らんとす。平太郎來り會し、弓を射て鷹の足尾を斷ち柳の難を救ふ。この柳の精その恩に感じて美人と化し、平太郎の妻となり、綠丸といふ子を生めり。話頭一轉、都に於ては後白河法皇御惱まします。或る夜靈夢ありて、法皇の前生を告げ給はく、「先生は蓮花三坊といひし修験者にて、三熊野に歩を運び遂に當山に身まかる。修験道の奇特により今日後白河の法皇と生る。前生の髑髏柳の棺に止まる。其の髑髏を求め其の柳の大木を以て棟とし三十三間堂の御堂を健立せば忽ち平癒すべし」と、即ち此の柳を伐り採らしめんとす。是に於て平太郎の妻か柳は最愛の夫と子とに別れざるべからず。この段この離別を寫せり。か柳は平太郎と綠丸とが寢につきしを幸に身の由縁をかこち離別を告げて去らんとす。平太郎夢幻にこれを聞き起ち上りて留めんとす。老母、綠丸も共に起き出づ、か柳執着禁ずる能はず。折から風に連れ伐木の音丁々ど聞ゆれば、今はとて後白河法皇前生の髑髏を夫に渡し「それを手柄に再び出世を

三十三間堂棟由来

平太郎住家の段

平太郎は北面の武士、横曾根次官光當の子なり。光當弓矢の争より武者所時澄といふ者の爲に討たれ、其の仇を報せんとて暫く母の里常陸に退きしが、五年以前願望ありて此の紀の國に來り、三所權現に祈誓す。さて此の熊野山中に年ふる柳の大木あり。或る日季仲(源義親が謀叛の方人なりといふもの)鷹狩に來り、鷹の足尾この大木にかゝり將にこの木を伐らんとす。平太郎來り會し、弓を射て鷹の足尾を斷ち柳の難を救ふ。この柳の精その恩に感じて美人と化し、平太郎の妻となり、綠丸といふ子を生めり。話頭一轉、都に於ては後白河法皇御惱まします。或る夜靈夢ありて、法皇の前生を告げ給はく、「先生は蓮花三坊といひし修験者にて、三熊野に歩を運び遂に當山に身まかる。修験道の奇特により今日後白河の法皇と生る。前生の鬮體柳の梢に止まる。其の鬮體を求め其の柳の大木を以て棟とし三十三間堂の御堂を健立せば忽ち平癒すべし」と、即ち此の柳を伐り採らしめんとす。是に於て平太郎の妻お柳は最愛の夫と子とに別れざるべからず。この段この離別を寫せり。お柳は平太郎と綠丸とが寢につきしを幸に身の由縁をかこち離別を告げて去らんとす。平太郎夢幻にこれを聞き起ち上りて留めんとす。老母、綠丸も共に起き出づ、お柳執着禁ずる能はず。折から風に連れ伐木の音丁々と聞ゆれば、今はとて後白河法皇前生の鬮體を夫に渡し、「それを手柄に再び出世を

なし給へ」と呼ばりつゝ姿を消す。平太郎縁丸を連れて柳の本に行く。其の留守に和田四郎(前條源義親謀叛の一人)強盗に押し入り金を奪はんとすれどもなく、佛殿の欄骸を取らむとす。老婆支へんとして敵せず遂に池中に投せらる。折柄平太郎歸る。此の有様に驚き母を池中より引き揚げて蘇生せしむ。此の有様を窺へる和田四郎再び顯はれ、奪へる欄骸は何者の欄骸なるかを詰問す。平太郎母の敵討たんとすれども夜盲なり、詮方涙に暮れてお柳を呼び、權現に祈る。忽ち両眼明かなり。即ち難なく和田四郎(實名鹿島三郎義連)を討つて母の仇を報ず。末段柳の大木は倒されて曳かんとするに一寸も動かず。平太郎縁丸出でて繩を取れば苦もなく動く。平太郎木やり音頭を歌うて引き出づといふ筋。此の段、當時甚だ流行す。これ聲曲の變化多ければなり。然れども全段荒唐無稽にしてさしたる教訓を含まず。唯面白しといふに過ぎず。強ひて之れを求むれば無情の草木も平太郎が深切に感せることゝ平太郎が親の仇を報せんと苦心せしとにあれば、この段のみにてはさまで感も深からず。

祇園女御九重錦

お柳別の段

祇園女御九重錦は寶曆十年の作に係り、三十三間堂棟由来は文化十三年の作なり。後者は前者の改版にして文句の一二を改めしのみなれば大差なし。故に筋書を略す。

傾城阿波の鳴門

順禮歌の段

阿波の十郎兵衛は阿波侯に仕へし武士なり。主家より預りし名劔國次の刀を何者にか盗まれ其の詮議のために浪人の町端なる玉造に身を隠し、銀十郎と名を替へある方便より盜賊の群に入る。或る日武太六といふ悪者來り、十郎兵衛の引受にて他の者に貸したる金を唯今返せと厳しく催促す。女房お弓種々に歎願すれども聽かず。十郎兵衛日没を約して彼と共に出で行く。引違ひて飛脚あり。一通を投げ出して去る。女房開き見れば同類に吟味かゝり、中には捕へられし者あり、寸時も早く立退くべしとの知せ状なり。女房驚き且つ悲しみ神佛に祈誓をかくる時しも、順禮歌を唱うて來るものあり。女房施與せんと門に出づれば可憐の少女なり。呼び入れて問答するうち少女は圖らずも夫歸が國に残せし愛女なること判明す。小女身の來し方を語り悲哀を極む。お弓心中哀れに思へども今の身上、罪我が子に及ばんことを恐れ故らに名乗らず、路金を與へて歸郷を促す。小女名殘惜しげに去る母情緒千々に碎け、遂に意を決して後を追ふ。黄昏に至り夫銀十郎少女を伴ひて我が家に歸り見れば妻あらず、つぶやきつゝ少女に向ひ、今乞食共がうななを苛み銀を奪はんとせるより助け歸りしが、
「そなたは金を所持し居るや」と問ふ少女銀は小判を澤山に持てり」と答ふ。銀十郎暫し借んといふに聽かず大聲をあぐ。銀十郎近所の聞えを憚り少女の口に手を當て窮狀を訴へて承諾せしめんとす。手

を放せば少女は既に絆切れたり。銀十郎驚き、呼べど呼べど蘇生せず。慌わてて布團の中に匿す。所へ女房歸り今日國元の娘おつる不思議に我が家に來りし事を詰る。銀十郎、娘の著せし着物を聞き大に驚き、さては我が殺せしは娘のおつるなりけりと仔細を語りて女房に懺悔す。女房驚歎して死せる娘を抱き涙に暮る。娘の懷中に一書あり、開き見れば己等夫婦に宛てて、老母が臨終の際に書せし狀なり、中に國次の刀は郡兵衛が盗みしどの文言あり。夫婦は驚きの中にも喜色あり。折柄捕手押し寄す。十郎兵衛我が家に火を放ち、夫婦共に遁走すといふ筋。

この段は最も人口に膾炙せられたるものゝ一にして本縣と縁故深き語り物なり。十郎兵衛が目的のために手段を擇ばざりしは惜むべし。一段哀れなる語り物といふの外多く教訓を認めず。唯探るべきはかつるが海を渡り、山を越えて父母を尋ぬる可憐の情と母お弓が子に對する慈愛の情とのみ。

三十三所 花の山 壺坂靈現記 澤市内

大和國壺坂の片邊、土佐町に澤市といふ座頭あり。妻をお里といふ。琴三味線の稽古をなし、貧苦に世を渡れり。お里貞節にして夫思ひなり。夫澤市が抱瘡のために盲目となりしを如何にしてか本腹せしめんと、毎朝七つの鐘(今の午前四時)を合圖に壺坂寺の觀世音に祈誓をかくること茲に三年に及べり夫之れを知す。却て妻を疑ふ。或る日妻を捉へて苦情を述べ且つ恨む。お里始めて夫が己を恨める

を知り、冤を訴へ、苦衷を陳じて夫を慰む。澤一疑團忽ちに解け妻の親切を謝す。然れども澤一心中覺悟する所あり。これより兩人して觀世音に詣づ。澤一歌に托して人生の無常を語る。妻これを覺らず、間もなく壺坂寺に達す。妻は夫に言ひ聞かして寺に残し、己は炊事其の他の用意にとて歸宅す。後に澤一獨言して己が妻を疑へるを懺悔し、その貞節を謝し、且つ妻の行末多幸ならんを祈りつゝ寺を出で山を登り幾十尋の溪間に身を跳らして投す。暫くして妻お里は寺に歸り見れば既に在らず。氣も狂亂して山を辿れば月の光に夫の杖を得たり。おはれ夫はこの溪間に投せしかと悲歎やる方なく、遂に己も夫の後を追はんと投身す。やゝありて麝香四方に薰じ天の一方に音楽ありて、雲間より觀世音現はれ微妙の御聲にて澤一、お里を呼ぶ。兩人目覺むれば、身内に一つの疵だになし。茲に兩人觀世音の功德に感じ、西國三十三ヶ所を順禮すといふ筋。

妻お里か貞節を守り、艱苦缺乏に打克つて、三年の間祈願を怠らざりし辛苦は、今の輕佻浮薄の世名譽に懂がるゝ婦女子等のよき鑑といふべし。

然れども此の段澤一がお里を疑ふ詞の中軟弱に亘る語句なしとせず、これ最上の語物たらざる所以殊に「毎晩七つからさき云々」の語は卑猥なり。但し現今關東、關西共に多くは省きて語らる、當然といふべし。

一の谷 嫩軍記

須磨浦の段

此の段玉織姫が敦盛卿を追うて濱邊を行く所より始まれども、昇猿の語句甚た多く、心ある者の聞くに堪へざるものあり。されば現今多くは前段を省き、一組打より語らる。茲に選定せるも前段を省くものとしての見解なり。

須官大夫平敦盛、御座船にある父經盛卿に身の上を告げ知らせんと、須磨の磯邊に出でしが船は既に沖合にあり。詮方なく駒を海中に乗り入れんとする折柄、關東の豪將熊谷次郎直實後より返せ戻せと呼はる。敦盛脚敵に聲をかけられて逃ぐるは昇性なりと、直に駒を返して殊勝にも剛者と切り結ぶ。勝負果てしなく又物を棄て馬上に組合ひしが、元より直實に敵せんやうなく、馬より落ちて組み敷かれたり。熊谷、敦盛が花の如き顔ばせを見て、我が子小次郎を思ひ助けんとせしが、味方の平山の武者所に見付けられ、詮方なく我が子小次郎を身替とし、但し身替なることは三段目に始めてわかる。大音上に無官 大夫敦盛を討ち取つたりと呼はる。その聲に驚き磯邊に伏せる玉織姫、平山に刺されて濱邊に伏す。起さ上りて其の首に絶りつき、前後不覺に歎く。(但し深手に弱りて目見えず)直實熟々世の無常を悟り陣屋に歸るといふ筋。

世に平家の運命ほどあはれにも亦はかなかりける悲劇はあらじ。此の段、源氏の剛者熊谷次郎直實

が平家の公達無官太夫敦盛卿を、須磨の浦に組敷きながら青黛碧玉の如き御粧を見てこれを討つに忍びず、我が子の小次郎直家を身替りとせし血あり涙ある趣向なり。

日吉丸稚櫻

五郎助内
(小牧山城中)の段

齋藤龍興の舊臣加藤忠左衛門清忠、主君の運命日に非なるを知り隠遁して鍛冶屋となり渡世す。一女一男あり、女をお政といふ。女婿に源治郎といふ者あり。木下藤吉の臣となり堀尾茂助吉晴といふ。吉晴の義父源左衛門といふもの嘗て清忠の手に斃れ、今や敵味方なり。吉晴是に於て義として妻を離別せんとす。お政悲しみて自刃す。清忠娘の愛に溺れ陰かに切腹し、苦痛を隠して賀吉晴に龍興の居城稲田山の間道を教へ故らに娘を勸當す。お政並に母悲歎す。清忠の衷心は娘を勸當して吉晴の妻たらしめんとせるなり。吉晴之れを察して妻たることを承諾す。清忠喜ぶ。死に類せるお政も亦大に喜ぶ。かゝる所へ木下藤吉顯はれて清忠の苦衷を察し、お政の弟竹松を養つて臣とす。これ加藤清正の生立なりといふ筋。

段中清忠が死せるお政の首を討ち、我が隠匿ひし龍興の息女萬代姫の身替に立つる所あり。これ女婿吉晴に間道を教へたる罪を償へるなり。而して自分も切腹して義者の節を立てたり。面白き脚色なれども、兎に角裏切は不忠といはざるを得ず。又お政の詞の中「わたしと一所に云々」の鼻猿の

語あり。現今大抵はこの十數字を省きて語らる、當然の事なり。末段竹松の詞殊勝にして人を感動せしむ。

玉藻前旭袂

道春館の段

人皇七十四代鳥羽院の御宇、御兄薄雲の皇子謀叛を工み、犬淵源藏、驚塚金藤治等を語らひ御代を覆さんとす。茲に硬直の臣右大臣藤原道春といふものあり、獨り王子に加擔せず。然れども病氣のため遂に死亡せり。残るは後室と二人の娘なり。姉を桂姫といひ妹を初花姫といふ。王子常々桂姫を懇望し驚塚金藤治を上使として召連れしむ。金藤治道春の館に至り上使の旨を傳ふ。桂姫は既に相愛あり陰陽の頭阿部の恭成が弟采女之助恭清といふ。母之れを知り、且つは姉娘桂姫は拾ひ子なるより上使に向ひ、姉娘を得たる故由を物語り、妹初花姫を身替にせんと請ふ。金藤次聽かず、後室命を天運に任せ双六の勝負をなし負けたる方の命を取らんことを請ふ。金藤次之れを許す。妹初花姫勝負に負け、潔く首さし伸ぶ。然るに金藤次姉桂姫の首を討つ。後室怒り薙刀を取つて金藤次を突き、采女之助も走り出で、金藤次を刺さんとす。金藤次暫くと止め懺悔して、當家の寶劔獅子王の劔を盗みしことを白狀し、姉桂姫は自分の子にして五條坂の邊に棄てたりしを今始めて當家に拾はれたるを知りたれば、義として妹姫を討つこと能はずと述懐し、劔は王子の館にあり、衝を以て取り返されよと

言ひつゝ、娘の首をとりあげて愁嘆之れを久しうす。采女之助其の首を王子に奉り、虚實を以て御劔を奪ひ取らんと出發す。折しも勅使來り、妹初花姫名を玉藻前と改めて入内すべしと宣す。即ち入内すといふ筋。

現今最も流行せるものゝ一なれども、皇子の謀叛、采女之助桂姫の相愛等風教上より觀る時は、忌むべきものあり但し右大臣道春の後室が眞實の娘をば義理ある姉娘の身替にせんとしたると、金藤次亦勝負に勝ちし眞實の娘を切りしと、一を吉野の櫻に喩へば、一を富嶽の雪に比すべし。孰れか清、孰れか潔。

玉藻前旭袂化粧殿の段

西伯文王、暴逆の君殷紂王のために捕へられて、幽里城に押籠められ將に拷問せられんとす。文王の妻錦糸連我が子錦舎を連れ、沈香亭といふ化粧殿に忍び入り、紂王の后姫に懇願して寃を訴へ助命を請ふ。姫妃欺きて請を客ると折柄、飛仲官といふ惡臣文王を引立々々糺明す。姫妃暫くと留めて柳を脱かしむ。妻子駈けよりに喜ぶ。妻子御禮のため殿上に上りて禮す。姫妃錦舎を近く引寄せ隠せし短劔を抜き錦舎を刺さんとす。錦糸連驚き支へんとすれば脾腹を蹴て階下に墜せり。飛仲官飛びかかりて縛す。飛仲官姫妃の命により、錦舎の胸を刺し腸を文玉に食はしむ。文王平然としてこれを食

ふ。村王文王を愚蒙なりとして放ち御殿に入る。所へ文王の忠臣雷震といふもの、大公望の指圖にて數萬の軍を以て押し寄せ飛仲官と戦ふ中、大公望威風堂々と入り來り遂に雷震、王を討つといふ筋。(姫妃白狐の姿を現して遂に殺されしが、不思議や姫妃の戸より一條の陰風虚空に昇り、金毛九尾の姿をわらはし東方をさして飛び去り日本に渡る)

文王者の師をあげて暴君村王を討ちしこと、彼の國體としては惟むべきにあらざれども我國體より觀るときは不忠不義たるは勿論なり。錦糸連が夫のために盡せる誠、文王が子の肉を喰ひし忍耐皆稱するに足れども村王及び姫妃の暴戾あまり慘酷にして聴くものをして戰慄せしむる缺點あり。

假名手本忠臣藏

桃の井館の段

桃の井若狭之助安近、昨日殿中に於て高師直と口論し、不首尾をとりし様子をば、口善悪なき下僕共口々に噂し合へるを、家老職加古川本藏之を制する所へ、妻となせ娘を連れて來かゝり、夫に會うて奥方の御心痛一方ならず、如何ませしといふ。本藏直にお目にかゝらむとて行かんとする折柄、大星由良之助の子息力彌、主人鹽谷判官の使者として來る。娘小浪出で迎ふ。二人は許嫁の相愛同士なれば逡巡して一語を發する能はず、小浪漸く心を鎮めて挨拶す。力彌禮義を正して口上を述べ、若狭之助「聞いたく」と立ち出で、使者力彌を返し家老職本藏を召す。本藏畏りて座せば、殿、嚴とし

て本藏に、「今予が言ふ事何によらず畏るとの誓言聞かむ」といふ。本藏躊躇せしが、殿の意慥ならねば、差添抜き持ち金打す。是に於て若狭之助昨日の遺恨を述べ、「明日は武士の意地として、勘忍ならず、師直めを眞二つに切捨つる覺悟なれば、必ず留むることなかれ」となり。本藏突然庭前に飛び下り、松の一枝を伐る。若狭之助喜びて奥に入る。本藏直に勝手口に走り出で、早馬にて、高師直の館に走らんとす。女房となせ娘小浪轡に絶つて止むるを、鏡の鼻にて蹴飛ばし馬煙立てゝ駆り行くといふ筋。(これ高師直に贈せんとしてなり)

加古川本藏が主君のため、師直に贈賄して難なからしめたるは深き智謀といふべし。贈賄は勿論罪悪なり、然れどもこの瞬間に於ては、事是に出づるより他に策なかりしなるべしとはいへ。此段深く考へざれば謬りを教ふるの虞あり注意を要す。又小浪が出迎ふる所、軟弱の語句あり最上ものにはあらず。

假名手本忠臣藏

六段目 (勘平切腹)

早野勘平の妻おかる、夫は瀨に出で曉かけて歸らず。父與一兵衛は、おかるの身賣相談に行きてこれも歸らざるに予心配しつゝ待ち、母と暫く對話あり。所へ祇園町の一文字屋といふ女郎屋より、駕籠を昇かせておかるを受取りに来る。二人は不審かり親仁は未だ戻らずといふ。亭主も共に怪しみしが

老爺殿の證文あればとて、無理に引き立てかかるを駕籠に乗せて立ち出でんとす。折柄鉄砲を負ひて夫勘平歸る。此のありさま、仔細を問へば、おがるは夫が入用の金を調達せんため身を苦界に沈めんとすと哀情を語る。勘平亭主と對話中縞の財布の話聞き、さては已が前夜猪と間違ひ打とめしは親仁殿にてありけるかと、愕然たり。次に勘平おがるの別離を悲しむ件ありて遂におがるは祇園町さして昇かれ行く所へ狩人三人連れにて與一兵衛の死骸を、戸板に乗せて昇ぎ込む。老母悲歎止まず暫くありて、老母勘平の様子のためならず、尙又勘平の懐にある財布を瞥見し、最前一文字屋の亭主の話と符合せるより、茲に勘平を疑ひ、強ひて勘平の懐より財布をとり出せば血痕あり。母狂氣の如くに怒り、勘平を引据ゑ打擲折檻す。勘平も身の過の天罰と思ひ諦むる折柄、原郷右衛門、千崎彌五郎入り來る。母訴へて、成敗を請ふ。彌五郎一刀の下に斬り棄てんとす。郷右衛門之を止め、理を迫めて勘平を誡諭し、亡君の御耻辱なりと説破す。勘平堪へ兼ねて割腹し、始終を物語る。彌五郎戸板の死骸を檢すれば鉄砲疵にあらすして、刀疵なり。是に於て、與一兵衛を討つて金を奪ひしは九太夫の忤定九郎といふ悪黨にして、勘平は暗夜に猪と間違ひて定九郎を斃せしといふこと分明し、母は勘平に謝し、原、千崎の兩人は連判狀を取り出し勘平に血判せしむ。勘平喜んで死すとも敵討の御供せんと遂に息絶ゆといふ筋。

勘平の女房おがる、身を賣つて夫の功を建てしめんとする節烈、原郷右衛門が事を分け理を迫めて

の訓誡、勘平が死して忠義の鬼となり、極天仇討の御供をせんといふ誠忠、何れも大和魂の發揮にあらざるはなし。

然れども、段中一二軟弱の語句あるを以て最上のものと認めず。

源平布引瀧

松波琵琶の段

源平布引瀧は、人皇八十代高倉天皇未だ十歳にも満ち給はざる御時、いみじう秘め給へりし紅葉をば、心なき仕丁どもの、かき集めて焚きたりけるを御咎もなく、却て唐詩「林間煖酒燒紅葉」石上題詩「拂綠苔」(自氏文集)の心を得たり。優しうも仕りたるものかなとて、叡感ありしといふ史上に有名なる御事蹟を骨子として、これを七十七代御白河天皇にかへたり。

次に多田藏人行綱といへる源家の武士と、待宵の小侍従といへる才女とを假り來りて、其の間に小櫻といふ子をまうけ、親子密に清盛を狙ひ帝を奪はんとする趣向なり。

附言 多田藏人行綱は源氏の武士なれども、鹿ヶ谷の密事をば平氏に漏らせし變節の武士なり。後頼朝の兵をあぐるに當りて、再び源氏に屬せり。又待宵の小侍従は近衛の大宮とて、世に二代皇后と稱せられ、後徳大寺左大將實定卿の姉君なる宮に仕へし侍女なり。福原遷都の後も、大將しばく舊都の月を戀ひ忍びて上洛し、小侍従と相見て情緒綿々たるものありき。待宵とは大將に

送りし歌よりの名なりといふ。詳細は源平盛衰記第五、第十七の巻に詳し。共に正史と混せざるやうにどかくは記しつ。

此の段、後白河法皇、清盛のために、鳥羽の離宮に幽閉せられ不自由に過させ給ふ。折柄松波檢校琵琶を携へて出仕し、君を慰めんとす。しばし一間に待つ折柄、小櫻來りて檢校を導かんとす。相見て父子なるより共に驚く。檢校、小櫻に母待宵の消息を問ふ。小櫻「母は敵手に斃れたり」と泣く。檢校無念の涙をふさへ、娘を慰め且つ叱す。折柄人の足音聞えければ、悟られじと小櫻に手を引かれ奥殿さして行く。折しも秋は未なり、仕丁三人庭前の掃除をなし紅葉を折りて焚く。茲に總解に述べし故事あり。三人君より賜はりし酒に酔ひ、三人上戸の滑稽あつて、其の中の一人平次といふ奴、酌に來りし小櫻を捕へ、汝の父は源氏の殘黨多田藏人行綱ならずやと詰る。小櫻知らずと詫ふ。平次、小櫻を縛し折檻す。折しも檢校御殿を下り來て此様子を見、不憫の心を隠して仔細を問ふ。平次故らに檢校の面前にて構問し、且つ心ありて檢校に向ひ、琵琶の一曲を所望す。檢校琵琶を彈するに忍びざれども、悟られまじと一曲を彈す。平次又小櫻を責むること愈々慘憺を極む。小櫻は目前父の行綱あれども決して白状せず。父悲歎の思に沈む。その隙を窺ひ、平次箆に任込みし刀を以て檢校を討たんとす。行綱、丁次を蹴倒し小櫻を脇に抱き奥庭さして駆け込むといふ筋。(仕丁三人は清盛より帝の守護を承りし匿目付なりしなり)

此の段小櫻が忠義のために父の誠を守り、慘憺なる拷問にあふも尙白状せざる心事の壯烈、殊勝感ずるに足るものあり、因にいふ、「うきつれぐの官女達」より「暫しのうさをはらしける」まで軟弱の句省きて語るか、語句を改めて語るを可とす又平次の詞「めつたに色事せまいぞへ」の句も、近頃種々に替へて語る者あり、これも何とか演藝上差支なき様、改作したし、

戀女房染分手綱

重の井子別の段

伊達與作の一子與之助、三吉と名を替へて馬追となる。時に丹波由留木侯の姫君、江戸に下るに當り三吉召されて駄馬の列に入り、姫君の機嫌を直したる賞として、姫君の乳母重の井より菓子と金とを貰ふ。三吉お乳の人は重の井といふことを知り、「然らば我母様なり」と抱き付く。重の井振り切りて「馬方の子は持たず」と叱る。三吉素性を述べ、父は伊達與作なることを語るに及び、眞に我一子なるを知り抱き上げんと思へども、奉公大事殊に姫君の不名譽にもならんかと、千々に心を碎きしが結局道理を論じて歸さんと、是に自分の身の上の始終を詳に物語り、或は歎き或は耻しむる折柄「御前様の御召なり」と重の井を呼ぶ。重の井三吉を押し出す、不憫や三吉泣々出で行く。母離別の情に堪へず、愁歎す。母あり合ふ一步の金子を與へんとす、三吉「他人に金賞ふ理なし」と振向もせず出でゆく。間もなく姫君御立なりと呼はる、三吉姫君の御傍を承り、馬子歌歌うて出發すといふ筋。

三吉、母を慕ふ情の切にして沓を打ち草鞋を作つてまでも父母を養はんといふ可憐の情、孝といふべし。重の井が姫君の御名の穢とならんを懼れ、理をせめて門外へ出さんとしたるは詮なきことなり。三吉その條理を解せず、母の與ふる一步の金を斥けて「馬士ころすれ伊達の與作が總領じや」と名を重んじたるは流石に武士の子なり。武士道はもと武士の面目律たること、此の段にも知らるべきなり。

此の段重の井が三吉に對して懷奮の物語中軟弱の語句あり。

伊賀越道中雙六

沼津里の段

和田行家といふ者、同族の河井股五郎といふに殺され、一子志津馬敵討に心身を焦す。茲に沼津の里に蜘蛛助の平作といふ老爺あり。娘をおよねといふ。元瀬川といひて江戸吉原に全勢を謳はれしもの志津馬の妻となり夫のために心膽を碎く。ある日、一人の商人平作に荷物を擔がしめて此の家に來り家貧なるを憐み慈惠を施せるより、遂に一宿することとなれり。(以上沼津口)客人寢に就きし後、およね心に思ひらく、本日老父が足に傷し、客人より名薬を得て全癒せしと聽く。夫の病氣も敵を討ち損じて深傷を負ひしが因なれば如何にもして、彼の名薬を得んと、遂に悪心を起し、深夜客人の枕元を捜せしに生憎客人のために捕へらる。老爺目を覺しておよねを据へ折檻す、およね申譯のため始終を

物語る、是に始めて客人は老爺が自分の實父なること、およねは即ち妹なるを知り、敵を尋ねる和田志津馬の身の上も知りたれども、如何せん自分は河井股五郎を主人に持つ身分なれば、名乗ることを得ずして蔭かに印籠を殘し、尙石碑代にと金子三十兩を置き此の家を立つ。

後に親子はこれに氣付き、今の客人が忤十兵衛なること、印籠は敵の所持せしものなることを知り、平作は十兵衛をして敵河井股五郎の在家を言はしめんと後を追ふ。およねも亦従ふ。平作追ひつき強いて敵の在家を問ふ。十兵衛事を分け理をせめて之を拒む、平作思ひ定めて切腹し、親仁が冥途の土産にと歎願す。是に於て十兵衛、敵は九州相良に在ることを告ぐ。およね叢中に隠れてこれを聞き取るといふ筋。

此の段、口の方は藝術上随分珍重せらるゝ段なれども、猥褻に亘る語句あり、切の分「およねは人物思ひ」より始むれば、さしたる難なし。十兵衛の義狭心は町人ながら感服、平作が女婿のために一身を棄てよの真心は賞讃すべし。およねがよし夫の病氣を癒さんためにもせよ、盗心を出せるは眞の誠にあらず。

伊賀越道中雙六

岡崎の段

唐木政衛右門、妻の弟志津馬が敵討をば助けんと、浪々して岡崎に來り、關所を破りて過ぐ。關所

の役人、組子を引き連れて唐木を追ふ。唐木組子を縦横左右に投げ散らす。其の手練を見て岡崎幸兵衛といふ者、役人に歎願して唐木を助け、我が家に伴ひ入る。茲に端なくも政右衛門は、庄太郎といひ未だ弱年の頃、勢州山田に於て武術の指南を受けし舊師なること分明せり。幸兵衛庄太郎に向ひ、頼みたきことありとて、女婿河井股五郎の味方を請ふ。即ち政右衛門は師思と肉縁とは敵同士といふ中間の板ばさみとなれるなり。政右衛門義によつて諾す。突然庄屋の方に御用なりと幸兵衛を呼びに來る。幸兵衛出で行く。政右衛門師匠の煙草を刻みつゝ待つ折柄、降り積む雪に閉ぢられ、宿を定めぬ順禮の女、赤子を抱きて此の家の軒下に来り、番の者に咎められ灯提をつきつけらるる柏子に、戸の際より政右衛門と顔見合す、順禮は政右衛門の妻お谷なりき、幸兵衛の妻出でゝ助けんとす。庄太郎之を止む。乃ち赤子を抱きて家に入る。政右衛門忍びて庭に出で癪に倒れし妻を蘇生せしめ、理を分けて去らしむる所へ、幸兵衛歸り來る。妻赤子の肌を検すれば、守の中に和州郡山、唐木政右衛門子己之介とあり。幸兵衛喜び、敵の助勢者唐木政右衛門の子を得たるは、これ幸の人質なりと喜ぶ。庄太郎飛びかゝりて赤子を突き刺す。幸兵衛怒つて故を問ふ。庄太郎曰く、敵の赤子を人質にするは卑怯なり。我股五郎に助勢すと誓ひし上は、敵如何に多勢なりとも何ぞ臆すべけんやといふ。幸兵衛庄太郎の意氣に感じ、股五郎に會はしめんと股五郎を呼ぶ。一間より出づれば何ぞ圖らん。和田志津馬なり。兩人共に大に驚く。幸兵衛庄太郎に向ひ、汝は音に名高き唐木政右衛門ならんと観破す。

幸兵衛の娘お袖、髪を剃り尼となる。これ股五郎と許嫁なるを以てなり。幸兵衛その義理より、股五郎を一旦は遁して義理を立つるといふ筋。

政右工門が師恩に報いんがために、一子を切つて潔白を露はす衷情悲壯といふべし。幸兵衛が敵味方両方に立つる義侠の行動、亦古武士の節を偲ぶに足る。娘お袖が悪人たりとも、股五郎といふ許嫁の夫あるに、志津馬を戀ひしは不義、後に尼となりたるにて僅かに罪を償ふに足る。

伊賀越乗掛合羽 圓覺寺の段

此の段伊賀越道中雙六の圓覺寺の段とは脚色を異にせり。現今語り物としては通常乗掛合羽の方流行せり。左にこの段の筋書をものすべし。

佐々木丹右衛門、和田志津馬を助けて師匠の仇を討たせんと己の妻たる河井股五郎の姉笹尾を離別す。笹尾は、義母の鳴海と共に離別せられし歎きに暮るゝ折柄、丹右衛門管領の使者として股五郎を請取りに来る。笹尾出で迎へ、辭令頗る婀娜たり。丹右衛門怒りて、汝等親子同腹にて股五郎を隠さんとするかと詰る。一間の内に股五郎聲あけて、既に覺悟なれば繩打てよと呼はる。丹右衛門之を縛せんとす。母鳴海繩り止めて曰く、妾は笹尾の乳母にして股五郎の實母なり。義として笹尾の離別を見るに忍びず、股五郎を手渡しする代りに笹尾の復縁を乞請ふ。丹右衛門不憫に感せしかども之を許さず。

是に於て母娘相共に死を争ふ。丹右衛門親子の義心を感じ、遂に笹尾の復縁を許し、婚禮の式を擧ぐ折柄九ツの鐘の音に、丹右衛門最早猶豫ならじと立ち上れば怪しや、腰立たずして倒る。笹尾も共に腕さ苦しむ、鳴海丹右衛門の懐中せる御書を奪ふ、實に二人は夜叉の鳴海に圖られたるなり。

丹右衛門無念の双を以て、股五郎を一討にせんと駆けんとすれば、股五郎が昵近の武士數多立ち塞がる。丹右衛門縦横に薙ぎ立て切り立て、奥に入る所へ股五郎の従弟にして、鎌倉の昵近たる悪黨城五郎顯はれ出でて、老女の働を賞し、股五郎は女乗物にて裏門より遁したりと懐中より一卷の連判状を取り出し、我は斯波義廉なり、やがて四海を覆さん大望なりと物語る。所へ丹右衛門踊り來りて城五郎を切り捨てんとす。老母鳴海今こそ婆が願叶ひしとて御教書及連判状を丹右衛門に渡し、用意の小筒を松が枝に放てば、數多の黒装束顯はれ出でて城五郎の義廉をば生捕る。これ皆丹右衛門が計略なり。義廉割腹して死す。丹右衛門妻笹尾母鳴海相共に毒に斃るといふ筋。

丹右衛門が命を捨てしは主君上杉家のため、女房母が毒を仰ぎしは互に夫婦のため、其の死や忠貞又烈。

此の段前半軟弱に亘る語句勦からず。且結構餘りに巧に過ぎ聽者をして全篇の旨趣を了解し易からざらしむるの嫌あり。

鏡山廓寫書

又助住家の段

此の段は望月源藏といふもの、蟹江一學等の悪黨と共謀し、主君を倒し御家を横領せんとせる悪事は端なくも、陪臣鳥井又助の憤死より露見に及ぶといふ筋なり。

鳥井又助の主人谷澤求馬は忠臣なれども、蟹江一學の讒により主家を勘當せらる。鳥井又助亦浪々して貧苦に世を暮し、或事情より金の才覺に苦慮せるを、又助の女房夫に匿して身を賣り金を調へて今や出でんとす。又助及び一子又吉別離を悲しむ主人谷澤求馬も亦今や又助の家にありて相共に感涙を添ふ。

折柄深縮笠に人目を忍び家老職保田庄司友治入り来る。谷澤求馬懐中より主家の重寶菅家の一軸を取り出し其の功により歸參の取成を請ふ。庄司友治請取りしが、主君は既に他界われしと告ぐるや兩人共に驚く。庄司求馬に引出物せんとて懐中より入つ梅の紋所ある一刀を與ふ。これ求馬が主家より拜領の逸物にして勘當の節、望月源藏に預けし所のものなり。然るにこれを音物とは不思議なりと思ふ所に、又助進み出でてその刀我に覺えあり。るれの現はれし上は主人の歸參叶ふべく、下郎の手柄と誇顔なり。これを聞ける庄司友治、突然鳥井又助覺悟致せど主君の位牌を懐中より出し、主君は五年以前筑摩川にて此刀にて暗殺せられ、此刀は近頃水底より得たりと物語り、谷澤求馬及び家來又助

兩人して主君を害したるならむと詰めかく。求馬立つて又助の髻を掴み折檻す。又助溜息をつき、や
 をら我が子又吉を引き寄せ細首を討つ。求馬竹槍を取つて又助を突かんとす。又助太刀を以て戦ひし
 が、遂に求馬のために脇腹を貫かる。是に又助主君を討ちし物語をなす。其の大要は主人求馬を讒せ
 し蟹江一學を刺さんとせしとき、望月源藏我を止め、「今討たば變あらん彼の歸りを待つて討て」とて
 一刀を與へらる。即ちその刀を以て筑摩川の川中にて討ち止めしが圖らざりき大殿ならんとはど、懐
 慨淋漓已が腕に喰ひ付きて泣く。庄司友治、谷澤求馬、始めて仔細を知る。又助最期の際に女房の心
 事を推して泣く。女房門口にありしが飛び入り、夫と子に取り纏りて悲歎やる方なくして自刃す。庄
 司友治、又助が臨終に際し、金打して求馬の歸參を誓ふ。又助莞爾として死す。庄司谷澤惡黨誅罰に
 向ふといふ筋。

又助思考足らざるが故に、望月源藏の言を信じ、遂に主君を害するに至る。眞に憾むべしとなす、
 然れども其の眞心は忠義より出でたることにして、下郎の分際としては避くべからざることなるべ
 し。その非を悟るに及びて、故らに主人求馬の竹槍に倒れたる衷情察するに餘りあり。又非を子孫
 に遺さざらんが爲め、一子又吉を討ちしは寧ろ眞の愛といふべし。

奥州安達原

袖萩祭文歌の段

平の謙杖直方に二人の娘あり。姉袖萩は奥州の夷阿部貞任に通じ、妹敷妙は八幡太郎義家に嫁す。貞任兄弟は義家に父を討たれ怨を報せんと流浪し、妻袖萩は娘お君を連れて袖乞となりしが、父謙杖一身の大事なりと聞き、雪の日忍んで邸内に入り、父母に見えんとすれども勘當の身の上なり、刺へ零落果てたる姿に言ひ入れん由もなし。謙杖夫婦戸外の人聲に何者ならんと戸を開けば圖らざりき娘袖萩なり。袖萩祭文歌によせて身の哀情を述べ、且つ夫の素性を陳ぶ。謙杖大に驚き、さては阿部貞任に通せしが、さすれば猶更對面するを得ずと考へ、戸を閉ぢて奥に入る。さすがに母親濱ゆふは可憐の涙と共に、慈愛の詞を残して入る。所へ貞任の弟、宗任(前出)鶴殺の科を引き受け引かれて此の家にあり。陰かに顯はれて神萩に刀を授け父を討てと強ふ。障子の内より曲者待てといひつゝ八幡太郎義家と名乗り宗任なることを觀破す。宗任覺悟して腕を廻せば義家の仁義之を縛せず、却て金札を結んで追放す。一方袖萩は宗任の難題に覺悟して自殺し、父謙杖も亦預り傳く環の宮を奪はれし申譯ど、且つは娘二人が敵同士の縁を結びし言譯より自刃す。所へ勅使中納言教氏(實は阿部貞任)顯はれ、此狀を見て驚きしがさあらぬ體を裝ひ、委細天聽に達すべしと威儀をなす。折柄鐘太鼓の響と共に八幡太郎義家立ち出で、中納言教氏卿とは偽、實は奥州の夷阿部貞任ならんと觀破す。貞任怒の髮逆立、義家と勝負せんとす。義家敢て驚かず、理を以て後日を期せんといふ所へ、最前の宗任も顯はれ、兄弟相共に白旗を手にし、この白旗は即ち義家の首なり。父頼時の吊合戦は後に大に爲すあらんと勇む。義家お君

を養つて子となすといふ断。

八幡太郎義家が貞任宗任の兄弟を許し正々堂々と後日の合戦を期する仁義ある武將の倂は羅如として古へを偲ばしむ、袖萩の娘お君が雪に凍えし母を勞はり、己の衣を脱ぎて著する孝心亦傳ふ。然れども袖萩は、元親にるひきて貞任に通せしこと、此段の最も注意を惹く祭文歌の中にあらはれて軟弱の嫌あり。

日蓮上人御法海 勘作住家

甲洲生澤の鵜飼に勘作といふものあり。身貧に逼り遂に悪心を起し殺生禁断の場所に鵜を使ひしこと露はれて捕はれ殺されんとす。然るに庄屋より金にて命を買ひ得べしといはれ、老母及び女房お傳、金の才覺に奔走すれども未だ調金することを得ず。日限も今日一日に逼りたり。お傳心痛して歸宅し老母に談合すれば、老母は既に調達せりといふ。女房大に喜ぶ。老母は仔細は勘作の助かり歸りて後に話すべしとて二人嬉しさに四方八方の話するうち、お傳が今日途中にての話なりとて鎌倉の執權北條重時公病氣にかゝり申の年月揃ひし男子の生贖を買はんとて來りしと語るに、老母驚愕せしがさらぬ體を装へり。折柄夫勘作夕暮に歸り來り、老母に謝す。お傳急に伴經市の在らざるに氣つき立たんとする裾引き止め、經市は家に居らすといふ。何處へ行きしかと問へば、行先いうて聞かせんと

て、老母は隠し持つたる懐劍を以て咽を突き、經市が行先は相州鎌倉松葉が谷と聞くより女房驚き叫ぶ。老母仔細を語り生膽取らるゝとは知らずして鎌倉の侍に養子にやりしと物語り、夫婦の者に詫言ふ。折柄表の方より庄屋の徳藏入り來り、鎌倉より本條判官といふもの出張り科料にて命を助くることはならずとて、いたはしや勘作殿は遂に殺されたりといひつゝ死骸を昇き入る。女房不審に堪へず差し寄つて見れば正しく夫の死骸なり。驚きて内に入り一間を見れば夫の姿は消えたり。さては夫の靈魂妻子に引かれて來りしかど狂氣の如く歎き、遂に意を決して生澤川に身を投せんとする刹那、日蓮上人顯はれてお傳を救ひ、經市を袈裟の裙より出して對面せしむ。この經市それより日蓮上人の門弟となり、名を日像と改む。この日像といふは師につきて都以西西國まで法華經を弘通したる名僧なりといふ筋。

この段無稽の事蹟を羅列したる嫌なきにあらねど信仰といふ觀念を得る便とはなるべし。又水流しの題目、流灌頂、經木流し等の故事を知り甲州生澤に鵜飼石といふものゝある事も會得すべし。

木下蔭挾間合戦 竹中砦の段

尾濃二州に勢を振ふ齋藤義龍の軍師に竹中官兵衛重晴といふ剛者あり。女千里は小田春永の臣左枝犬清と通じ、清松といふ一子を擧ぐ。今小田、齋藤の合戦中左枝犬清、竹中官兵衛の砦に忍び入り女千

里と密會す、官兵衛之を知り嚴しく二人を叱す。犬清自若として官兵衛の前に進み成敗を請ふ。官兵衛心動きて助けんとす。犬清舅官兵衛に向ひ、小田方に味方して己が勘當を許されんことを懇願す。官兵衛敵の情勢を知らんと欲し詐諾して、藤花の金打をなす。犬清、即ち味方の動靜を語りて曰く、今や味方は丹下、中島の両砦を殘し糧食亦無しと語る。官兵衛聞き終るや大音に軍勢を呼び、小田春永の陣所を衝かんとす。犬清舅が變節したりと殘念がり、太刀を抜いて突いてかざる、官兵衛若武者の利腕を捉へて投げ退けたり。犬清無念に堪へず切腹す。娘千里、母親と共に官兵衛に哀願す。官兵衛聽かず叱咤す。折柄大將齋藤義龍黒革威の鎧著て顯はれ出で、官兵衛の精忠を賞し、自ら戦陣に向ひ一舉に小田春永を討たんと出で立つ。官兵衛は數度の戦陣に手傷を負うたれば出陣を止めらる。折柄、續きて二回の注進あり、第一には大垣三郎味方の勝利を報じ、第二の注進は藤太といふ者「味方は敵の術に陥り、大將義龍公桶挟間に屯ありしを、裏山より攻めかけられ死地に入れる時しも、母衣武者一人左枝犬清と名乗りて飛鳥の如く縦横に薙伏し、大將の御命も危し」と報ず。竹中初めて左枝犬清を討らんとして却て敵が苦肉の策に陥りしを悟り、怒髪逆に立ち、五臟六腑を嘔上げんばかりなり。間もなく寄太鼓の響と共に敵の大將小田春永入り來り、義龍の運命は自ら作りし積罰なり。汝我が味方となり軍術の師範たれと諭す。官兵衛怒つて飛び掛らんとす。やれ早まる勿れ官兵衛、義龍の當の敵はこれにあり」と木下藤吉顯はれて母衣を脱げば、孫の清松を脊に負へり。官兵衛刀を振り上

げしが現在の孫なるにぞ、見惚れて恍然たり。傷負の犬清「今こそ許す女房」といふに、千里も喜び舅姑も恩愛の柵に縛せられて萬斛の涙を漉へ、隱遁して栗原山に入り、主君と智娘との菩提を吊はんとす。久吉犬清の子清松を養ひ左枝の家を嗣がしむ、これ有名なる左枝政右衛門時家なりといふ筈。

此の段、脚色の變化多きを以て劇として大に珍重せらる。竹中官兵衛軍衛に長ずと雖も、遂に木下藤吉の謀略に陥る。左枝犬清が命を棄てて小田家に盡せる苦忠は、久吉の術略なりとはいへ賞するに足る。齋藤義龍が暴虎馮河の勇は、遂に敵の術策に陥りて敗を取り命を棄つ。鑑みるべきなり。此の段犬清千里の密會及千里が父に哀願する所、軟弱の語少からざるの鉄點あり。

碁太平記白石噺

田植の段

白石の城下、片在所に與茂作といふ百姓あり。元は杉本甚内といひて河内の國の武士なりしが、仔細ありて浪人し、妻の縁にて今此の奥州にあり。家貧しく剩へ妻の病氣に貧しさ愈々加はる。與茂作に二人の女あり、姉をかきのといひ、妹をかのおといふ。姉は八年前年貢の未進より身を川竹の流に投じ、宮城野と名乗りて江戸吉原にあり。

ある日、與茂作次女おのぶと共に田植に出で、孝心深き娘の詞に感涙を流し越方行末などの物語す。與茂作、妻の病を苦し娘に命じて湯藥を與ふるため歸宅せしめ、自己は田に入らんとすれば足に障

るものあり。取り上げ見れば一面の鏡、これ白石藩侯の重寶にして前夜何者にか盗まれたるを賊の隠し埋めしものと知られたり。この様子を窺ひし代官志賀臺七家來を連れて駈け來り、與茂作より鏡を奪はんとす。與茂作遣らじと争ひ、遂に臺七のために殺害せらる。此の時早く彼の時遅く駈け戻りしかのぶ、親の仇と早苗を取りて臺七に打ち付く。臺七かのぶをも殺さんとす、小女悲鳴をあげ救を求む。土地の百姓數多駈けつけて小女に加勢す。所へ與茂作の妻の兄庄屋の七郎兵衛といふもの走りつきて臺七と争ふ。臺七曰く與茂作を殺したるは吾にあらざと言ひ張る。折しも臺七の家來貫平といふもの來りて、弟御、臺藏様何者にか殺されて明神の森林中にありしといひて注進す。臺七驚きしがこれよき便りと、七郎兵衛に向ひかく我が弟も何者にか殺されたり。必ずこの近邊に浪人の徘徊するならむ。與茂作を殺せしも恐らくは同一人ならんと頓智の好舌に百姓共も七郎兵衛も遂に瞞着せられたり。乃ち臺七弟の死骸を連れ歸る。七郎兵衛もおのぶと共に與茂作の死骸を戸板に乗せて我が家に歸る。黄昏時に臺七畦道を傳うて以前の場所に戻り深田の中より件の鏡を拾ひ上げ獨り微笑する後より何者かその鏡を奪ひ跡を晦ますといふ筋。

風教上可もなく不可もなき語り物なり。一篇を通ずれば勸善懲惡、因果應報の理に合する様仕組まれたれども、此の段のみにてはさまで深き感動をも與ふるものにあらず。おのぶの孝心、七郎兵衛竝に百姓共の義侠まづく探らば探るべきか。

祇園祭禮信仰記

上煖屋の段

足利十三代將軍義輝公、松永久秀等の逆臣に弑せられ、若君輝若は乳母の侍従に傅かれつゝ岸野の里をさして落ち行く。未だ踏も習はぬ徒跣なれば歩行儘ならず。侍従の乳母若君を抱きながら榮枯盛衰の懷を述ぶ。折柄このあたりに網を張りて待ち居たる盜賊三人この有様を見、生捕りて松永大膳に渡さば褒賞は思の儘ならんといふ慾心より、輝若君を捕へんとす。侍従之れを遮り、若君を抱き一腰を抜き放つ。盜賊共も大太刀を以て立ち合ひしが、遂に侍従のために二人まで斃されたり。残る一人の木藏といふ奴、一度は逃げたれども、若君を捕へんと又來り見れば侍従は數ヶ所の負傷に斃れたり。尙若君を捕んとして松の木の下に來り込藁取り除け見れば一人の男縛られ居たり。木藏この男のため欺かれ繩を解きやりしに却て己が縛らるといふ筋。因に云ふ、この男は新作とて岸野の是濟屋といふ藥屋の弟子新作といふ者なるが、主人の困難を救はんと上煖屋となり、或は非人となり人を欺きしを以て土地の百姓に縛られ居たるなりき。

乳母の忠烈はこの段の主體なり。盜賊三人が非業の最期を遂げしも、因果の理法を感ずるに足る。

此の段上煖屋新作を立物として考ふるときは假主人のためなりとも、詐欺を働き主人の娘に通せんとする卑劣の行爲あり。尤もこは前段にあることなれども連想し得るの處あり。

祇園祭禮信仰記

迷子の段

足利第十三代將軍義輝公の若君輝若は乳母の侍従が追利共と戦へる際に何處どもなく落ち行きしが、
 田舎の子供等に苛まれ笞杖にて打擲せらるる悲惨の境遇に陥り給へるを、ある家の老婆、子供等を追
 ひ散らし、若君を件ひて我が家に入れ、種々に尋ねれども唯知らずとのみ答へて實を言はず。子供心
 に世を忍ぶ身なるを思へばなり。然して只管乳母をのみ尋ね戀ふる情の切なるものあり。茲に、この
 老婆が家は是濟屋といひて藥屋なり。是濟屋夫婦に二人の娘あり。姉をお智恵といふ。若君に傳さし
 乳母の侍従とは實にこのお智恵のとなり。若君は偶然にも乳母の老母に救はれしなり。然れども互に
 これを知らず、若君が床の間に端然と座せるを見て老婆思へる様、或はお觸の廻りし室町の落人なら
 すやと疑ひ、尙尋ね問へども唯知らずと答ふ。次女が露代りて優艶に尋ねれば若君は機嫌麗はしく昨
 夜よりのありし次第を物語る。之れを聞きしこの家の奉公人新作といふ者(前段の上候屋)若君を見て驚
 き何か心に期する所あり。母娘二人にて若君を勞る。若君眠に就く。新作主人が金の爲に難儀せるを
 救はんため訴人せんと役所をさして走り行くといふ筋の。

風教上さまで教訓とすべきものなき語り物なると同時に、また多く非難すべき節もあらず。

壇の浦兜軍記

琴責の段

秩父庄司次郎重忠、鎌倉の命により、禁裏守護として京都河御所に在り。岩永左衛門致連これが助役たり。重忠は智仁の勇士にして公事裁判一も私なし。岩永致連は、表に忠義を飾ると雖も、心は私の遺恨より平家の殘黨惡七兵衛景清が在家を捜し、その私恨を報いんと心を碎き、竊かに重忠に秘して清水寺の轟坊に景清來らば搦め取れと命す。或る日、轟坊出家氣質に役所に出頭し、出家に武士を搦めよとは不條理なりとて訴訟に來る。重忠御坊に接して諸葛孔明が敵將孟獲を下せし例を引き、若し景清に逢はば源氏に黨して存命すべき様論されしと慇懃に陳べければ、轟御坊感じ入りて歸れり。今日は遊君阿古屋を審議する日にして、最早時刻も逼れりとして秩父の郎黨榛澤六郎、阿古屋を囚人籠より引き出して重忠の面前に搦る、如何に情を加へ問ふと雖も景清が在所を語らずと言上す。脇に控へし岩永拷問手ぬるさを以てなり。明日は予が嚴しく拷問して白狀せしめんといふ。重忠之を制し阿古屋に向ひ、情を推し理を分けて白狀せしめんとす。阿古屋尙知らずと答ふ。岩永堪らず又々品を替へて拷問すべしと威嚇す。阿古屋從容として岩永を翻弄す。重忠又之を制し、予が拷問すべしとて玉琴、三絃、胡弓の三樂器を取り出し阿古屋の前に並べたり。岩永重忠を嘲罵す。重忠耳にもかかけず阿古屋に三曲を彈せしむ、阿古屋或は曲によせ或は詞にて衷情を訴ふ。三曲終りて重忠阿古屋が景清を

知らぬは眞實なり、阿古屋を今日限り赦免すべしと宣す。阿古屋喜び謝す。岩永少しも其譚を覺り得ず重忠を詰る。重忠三曲の説明をなし、琴は即ち豎に見れば水の相ありこれ水責、三弦は二上りに氣を釣上ぐる天秤責、胡弓の弓のやがら責、と品を替へて責めたり。然るに聲曲亂れざるは眞實景清の在家を知らざるものなりと辯舌爽かに陳べければ、岩永對へん所を知らず。重忠阿古屋を己が屋敷へ率ゐて歸るといふ筋。

富山重忠の寛仁潤度、武士の典型として古來人の欽仰する所、こゝにもその節を窺ふに足る。この段、殊に故事を擧げ、故實を明にし、妙趣味ふべきものあり、但し阿古屋の懷古述懷する所、軟弱の語句あり。

釜淵雙級巴

五右衛門釜入の段

石川五右衛門遂に捕はれて、刑戮せらるゝ有様を敘したる段なり。仕置の場所は京都七條河原にして二町四方に竹矢來を結び廻はし、中に大釜を据ゑて油煎にするといふ、此世ながらの地獄の責なりし檢視役、早野彌藤次、岩木當馬、中央の床几に掛る。所へ五右衛門の父兵部出でて、盜賊は討首を以て極刑となす、釜煎は古來例を聽かずと訴訟す。檢視は罪の一々を數へて諭す。兵部之れに服せしが孫五郎市は何故に同罪々々と尋ねれば、五郎市は義母を殺せし罪によると辯す。時しも五郎市の實母

今いまは岩木いはき當馬とうまの妻つまなるお律りつ、駈かけつけしが、夫おつとは檢視けんしの役やくなれば夫おつとの思慮しりよを測はかりかねて、垣かきの外そとにあ
 り。折柄せりあひ五右衛門ごもん並ならびに五郎市ごろういち、首柳くみやなぎせられて引き出いださる。早野はやの彌藤やとら次つぎ何思なにおもひけん、五右衛門ごもん父子ふしの縛しば
 を解とき、五右衛門ごもんに悴せがれ五郎市ごろういちを不憫ふびんと思おもはば、一味いみの盜賊どぞくを白狀はくせうせよと論まをす。五右衛門ごもん自若みじやくとして辯べん
 じ白狀はくせうせず。辭世おせいの一句いっくを残のこす。「石川いしかわや濱はまの眞砂まじさは盡つくるとも世よに盜人ぬすびとの種たねは盡つきまじ」と。岩木いはき當馬とうま
 慈悲じひを以もつて責せむれどもこれをも拒絶きよせつし、五郎市ごろういちに覺悟かくごせしむ。五郎市ごろういち今生いまこんじやうに唯ただ一度いっど生母せいぼに逢あひたしと
 泣なく。垣かきの外そとには生母せいぼあり。哀痛あいつう悲歎ひたんやる方かたなく。五右衛門ごもんも感慨かんがいに咽ひびしが氣きを取り直ただし、五郎市ごろういち
 を抱いだき釜中かまぢうに飛とび入いる。母駈はかけ込こむ。當馬とうま遮さる。五郎市ごろういち父ちちに抱ひかれながら母ははの來きたりしを喜よろこび、最後さいごの
 暇いとまをなす。五右衛門ごもん釜中かまぢうにありながら群集ぐんしゆに向むかひ、懺悔ざんげ述わづら懐わいす。釜中かまぢうの油あぶらは今いまや沸わかきかへり、轟々とんたんと
 として雷らいの如ごとし。五右衛門ごもん五郎市ごろういちを高たかくさし上げ、今いまや最期さいごの際きばに釜底かまぞこに沈しづみ、打うち重かさなりて遂つひに狂けふ
 死しすといふ筋すぢ。(この跡あと、淵ふちとなりて、今いま、釜かまが淵ふちといふと分わか)

石川いしかわ五右衛門ごもんは義賊ぎぞくなり。然しかれども賊ぞくは即すなはち賊ぞくなり、惡にくむべき限かぎりなり。さはいへ、その最期さいごの壯さう
 烈れつなる古來斯こらいしかくの如ごときを聽きかず、滾たぎり立たつ油あぶらの釜中かまぢうに立たちて、盜心どしんの起おこりより説とき諄々じゆんじゆんとして身持みもち、
 虚言きよげん、博奕ばくあし等を誠まことひる所ところ、聽きく人に惡感化あくかんとくわを與あたふることはあるまじ。

關取千両幟

猪名川内の段

大阪、堀江の角力大關として人氣沸くが如き猪名川の女房おどは、留守せる所へ、夫猪名川、鐵ヶ嶽
 鈍多右衛門を伴ひ歸宅す。女房酒盤を出して饗應せる所へ、大坂屋より來りし使なりとて錦木太夫が
 身請の跡金を今日中に拂はねば、他に身受するものありと催促して去る。猪名川驚き、他人に身請せ
 しめては我が面目立たずとて立ち出でんとするを、鐵ヶ嶽之を止め、其の身受の主は即ち予なりと意
 地惡げなる態度をなす。猪名川、鐵ヶ嶽に向ひ予が主人のために盡す衷情を察して、太夫を譲られよ
 と歎願す。鐵ヶ嶽愈々乘氣になり歎願を容れざるのみか、剩へ猪名川を罵倒す。猪名川忍耐、低頭平
 身して哀願す。鐵ヶ嶽ますます威を張り、我が主人を辱めたる腹癒なりとて、足蹴にかく。折から表の
 方より今日の角力對なりとて投込む番附を見れば、豈圖らんや兩人の取組なり。鐵ヶ嶽心中戰慄せし
 かど、隱忍し事によりては、汝の依頼を容れん、水心あれば魚心ありなど仄しつゝ出で行く。おどに
 猪名川思案に暮れしが、今日の角力、勝を彼に譲らんと決心して出で行かんとす。女房これを留め、
 夫の髪を撫で付けつゝ仔細を語らしめんとす。夫言はず。女房、實は一間に於て様子を窺ひ知れるが
 故に、涙と共に策を案す。猪名川一言の下に拒く。又々呼出の使あり。猪名川意を決して出づ。女房
 續いて後より追ふ。相撲場の有様は賑かに番組取り盡し、中入前の大關相撲、西は猪名川、東は鐵ヶ

嶽と呼出す。兩人場に顯はれてむづと取組みしが、猪名川は覺悟の上とて今や危く見ゆる所に、進上金子二百兩最負よりと呼はる聲あり。猪名川聞いて元氣回復し、鐵ヶ嶽をば一舉主俵に顛倒せしむ。土俵上に二百兩の纏頭を與へしは即ち、女房おとはが夫の難儀を救はんと身を賣りし金なりといふ筋。猪名川が剛を以てして、しかも鐵ヶ嶽の足蹴打擲を忍びしは、主人に盡せる俠氣、女房おとはが夫のために身を賣りしは貞烈人を感せしむるに足る只事傾城の奪ひ合になど係るは風教上より見て惜むべき欠点なり。

關取二代鑑

秋津島内の段

關取秋津島、主君のため、己の弟子共に拂ふべき給金四百兩を以て傾城大淀を身請す。女房夫の眞意を知らず、嫉妬すること甚し。秋津島心ありて女房を離別す。一子國松、母に取り縋りて泣く。奥の間には高倉隼人、主君の使として宿泊せり。この痴話喧嘩を聽きて故らに咳嗽す。折柄表の方より秋津島の合關鬼ヶ嶽といふ者、秋津島の弟子籠石、鳴岩等三人を引き連れ來り、弟子三人を貫はんといふ。(この三人は給金の事より親方秋津島に打聽せられたるを遺恨に思ひ變節して鬼ヶ嶽に主替せる破廉恥漢なり)秋津島之を許す。是に於て鬼ヶ嶽改めて秋津島に向ひ強談して曰く、何故に我が弟子三人の頭を破りしかど、秋津島曰く、そは未だ我が弟子たりし時のみと辯す。鬼ヶ嶽重ねて懷中より給金の預り證文を

取り出し、この返答は如何にするかと責む。秋津島辭に窮す。鬼ヶ嶽乗すべしとなし、惡口雜言しつゝ剩へ雪踏を以て秋津島の頭部、面部の嫌なく打擲し、尙も暴言を吐きて立ち去る。奥の間より高倉隼人立ち出で、秋津島のふがひなきを罵り、ろの非道を怒り、尙明日鬼ヶ嶽との晴勝負を禁じ、憤然として立ち去る。忍び穩れし大淀走り出でて秋津島に取り縋りて泣き且つ慰む。何思ひけん秋津島大淀を捕へて猿轡を拵め、端座して書置を認め自害す。

話頭轉じて女房お里は己の兄、立行司庄九郎の宅に駈けつけ、仔細を話し共々夜中秋津島の家に来りみれば寂として聲なし。庄九郎戸口を蹴破り入りて見れば此の有様なり。女房忤共に驚歎す。先づ大淀の縛を解き、手負に手當して仔細を問へば傍に書置ありて女房も庄九郎も始終を知悉するを得たり。秋津島、突然一子國松を引き寄せ、臙脂を搦んで口中に押し込み悶絶せしむ。人々狂氣の沙汰なりと驚けば、秋津島全身の聲を張りあげて國松を呼び生く。不思議や國松、父の性魂を受け、見る間に堂堂たる大力士となり、二代秋津島として父の仇を報いんとす、といふ筋。

秋津島克く若君の依頼を躬行するために男の最大耻辱を忍び、遂には切腹し、魂魄を一子國松に繼がしめ仇を報いんとする忠君義烈の情何ぞ壯なる。憾むらくはこの段前半に軟弱の語句多く加之。主人の爲めとは云へ不正の金子を以て傾城の身請に費す様欠点の存することを。

近江源氏先陣館

四斗兵衛内の段

四斗兵衛、貧にして昇夫となり、相變らず大酒に思をやりつゝ暮す。或る日搥賣の長藏といふもの、樽を音物として昇夫の弟子入せんとて来る。四斗兵衛喜んで酒を飲む。長藏、見事なりお肴として太刀魚の作り物進上といひ黄金作の太刀を出す。四斗兵衛笑つて辭す。搥賣俄かに威儀を改め、天晴四海の軍師、その刀を以て汝が家に隠匿ひし時姫の首を討てと強ふ。四斗兵衛平然として諾す。女房驚き出でて遮れば、四斗兵衛怒る。女房一間に駆け入り姫を伴ひ出でんとするを、四斗兵衛拔討に姫の首を落す。長藏歎賞して歸る。女房死骸に取り縋りて歎き夫を恨む。四斗兵衛耳なきが如く熟睡す。折柄妻の兄片岡造酒頭迎の乗物を吊らせて時姫を受取に來り、謝禮なりとて衣服大小甲冑を並べ、主人時政公に見参の上仕官を取りもつべしと言ひ入る。女房堪へかね、兄の脇差を取つて自殺せんとす。片岡之を留めつゝ内に入れば、時姫の死骸横はれり。片岡怒りの顔色劇しく四斗兵衛に切てかゝるを四斗兵衛起き上りて立ち合ひ、兜を掴み飛鳥の如く翔りて一間に入る。片岡追うて奥に入れば折柄表の方に聲あり。江洲鮫ヶ井の住人和田兵衛秀盛殿御用意よければ坂本の城へ御入城あれ、三浦之助義村御迎なりと呼はるは最前の搥賣なり。片岡はかのれ四斗兵衛敵方といひ、姫の仇といひ、只一打と戸障子踏碎けば、和田兵衛秀盛美々しき軍師の骨柄にて床几に掛れり。悠然として片岡に言へる様、時

姫の身替となりし最前の女は汝が娘ならずやと観破し、片岡の誠忠を見抜き、片岡が迎の乗物に忍びし時姫を出す。時姫は、片岡の娘住の江が死骸にとりつき泣く。和田兵衛の妻、三浦之助に向ひ、「時姫は既に殺されたり。兄の娘住の江との縁組は差支あるまじ」といふに、三浦之助、片岡は鎌倉方へ返り忠せる者なれば、其の娘とは叶はじと拒絶す。和田兵衛、片岡が誠忠を證す。片岡は忠義は立ちしかども、一旦裏切の名を汚したればと自殺し長き物語をなす。和田兵衛立つて媒介をなし、時姫は三浦之助と婚嫁の誓約をなし、戦場に向ふといふ筋。

片岡の誠忠和田兵衛の智仁を兼ねたる所作、戦國武士の眞面目を窺ふに足る、但し時姫の詞軟弱なり。

近江源氏先陣館

船長の段

佐々木四郎高綱、謀略により船頭となり。矢走の濱に待つ所に、敵の大將とかぼしく一人の老武者來りて船に乗り石山へ急げと命ず。船頭櫓を押し石山指して漕ぎ出でしが、向風にて意の如くならず、遂に我家に伴ひ歸る。女房客人を迎へて奥に通ず。老人軍物語をなし佐々木四郎高綱の謀に陥り敗北して斯くの始末と船頭の厚意を謝す。此の日小四郎が忠死せし一七日の忌日に當る。女房小四郎を思ひ出して泣く。佐々木これを制す。又阿呆の益太といふ奴、小四郎の忌日なりとて一文餅三つ買

ひ來りて佛前に捧げ泣く。佐々木又之を制す。折柄佐々木の家來谷村小藤次床下より顯はれて勝軍を
 注進し、唯殘念なるは敵將時政を討ち漏せし事なりと物語る。佐々木時政の扮装を問ふ。小藤次仔細
 に答ふ。女房聞きて奥の老人は正しく時政ならむと夫に注意す。次に又四の宮六郎といふ者注進に來
 り、味方の一大事なりとて和田兵衛は大江の入道に毒殺せられ、三浦之助は落穴にかゝりてあへなき
 最後を遂げたりと注進す。佐々木驚きたる風をなし味方の本城へ駈向はんさまをなす。奥の老武者仔
 細にこれを窺ひ聞く。折柄鎧武者數多して鎌倉の大將時政公御迎なりと呼はり來る。時政悠然と顯は
 れて船頭夫婦に謝し、般長として家屋敷を建て與ふべしと誓ひ出で行く。佐々木平然と見送る。女房
 慌てゝ夫に向ひ時政を暗々と敵に渡すは何故と語る。佐々木徐に答へて曰く、彼は時政の謀にて討取
 つて我に油斷せしめんための膺者なり。我味方に變ある如く彼に聞かしめたるは、眞の時政を城外へ
 おびき出さん我が計略なりと語る。女房篝火始めて夫の奇計を知るといふ筋。

佐々木四郎高綱の計略に長せるは、前述小四郎恩愛の段に於て述べたるが如し、この段風教上より
 は別段非難すべきにあらず、劇としては目先の變化に富めるを以て珍重せらるれど、差したる教訓
 をも含まざる最上の語り物とは認められず。

妹 春 山 婦 女 庭 訓

柴 六 内 の 段

藤原鎌足公の臣、玄上太郎利綱、主君の勸當を受け、詮方なく興福寺山中に入り獵夫となり、名を柴六と改め貧苦に暮す中、天子眼の御惱あり。淡海公天子を奉じて同じく興福寺山中に百日の御祈願ありこの虚に乗じ禁裏にては蘇我入鹿謀叛し天子を擁せんとす。淡海公陰かに天子を柴六の家に隠匿ひ奉る。天子御惱により柴六の茅屋と知り給はず、内裏とのみ心得させ給ふ。柴六忠實に仕ひ奉る。或る時命せられて爪黒の女鹿を射たり、御感斜ならず。然れども鹿は春日の神鹿なれば界限の詮議嚴重なり。女房おきじ、夫が鹿を殺せしことを知らざれども氣遣ひて夫に尋ぬ、柴六知らずと言ひ紛らす時しも、庄屋の方より柴六を呼出しに來る。柴六の子三作(女房おきじの連子)父の身の上を案じ、自ら科を引受けんとて弟の杉松といふに訴人せしむ。杉松頭是もなく訴状を持つて興福寺々中に届け出づ、時こそあれ捕手の者共柴六の家を圍みて汝が家に隠匿ひたる天皇竝に淡海公を出せと罵り騒ぐ。柴六駆け出でて争ひしが捕手は三作を捕へて人質となす、柴六詮方なく我大庄屋の方にて申上げんと出で行く。一間に様子を聞ける淡海公さては柴六の訴人に行きしならむと慌てて天子を擁し連れんとす。女房おきじ、命に替へて夫に二心なきを誓ふ。折柄表の方より杉松を先に立てて興福寺の衆徒等入り來り、鹿殺三作を捕へんと騒ぐ、おきじ冤罪なりと争ひしが、三作は覺悟の上なれば潔よく縛に就き

陰かに父の身替なることを母に知らしむ。おき悲歎やるかたなし。折柄柴六心ありて熟醉し我が家に歸り上機嫌なり。女房は三作の身のトを語ることもならず衷心苦しむ。翌曉起き出で見れば、柴六瓮中にて次子杉松の咽を突けり。女房驚き慌て、仔細を問ふ。柴六居直つて淡海公に言上す。曰く御父鎌足公我が心底を疑はれ、昨日の捕手は拙者の心を引き見んための計略なり。されば今又悴を殺して二心なさを誓ひ奉ると語り終り、女房に向ひ汝の連子三作を人質に取られし故に心迷ひ、鎌足公に疑はれしは心外なりと怒る。女房初めて三作の成り行を語る、柴六これを聞き感慨に咽ぶ。此時鎌足公顯はれて柴六が心底を賞し、且つ汝が悴三作は不思議に命を助かりしとて三作を呼び出し語るやう彼を生埋めにする土中より、入鹿が隠せし八咫の御鏡顯はれたり。帝の御惱も神鏡の崇なんめりどて函より出せば光輝赫々たり、天子忽ち両眼明かにならせ給ひ、内裏に還御あらせらるといふ筈。

柴六夫婦が艱苦缺乏に克つて、一天萬乗の君を隱匿ひ奉り、剩へ一子を殺して二心なさを誓へる。誠思は以て懦夫を起たすべく、其の子三作が義理ある父の身替として鹿殺しの大罪をひきうけ縛に就く悲壯の行爲は以て鬼神を泣かしむべし。憾むらくは段中二三軟弱の語句あり。

菅原傳授手習鑑

櫻丸切腹の段

梅王、松王、櫻丸の三人兄弟は白太夫といふ百姓の子なり。菅丞相に仕へし舍人なりしが、菅丞相は

藤原時平の讒により九州に流罪の身とならせ給ふ。松王丸、心ありて時平に屬せり。ある日、白太夫が賀蓮の時、三人兄弟の夫婦皆集りしが、櫻丸ひとり會せず。賀式濟みし後兄弟夫婦皆歸る。「櫻丸の妻八重、心を痛め夫を待つ所に突然納戸口に忍び居りし夫出づ。八重驚き口説す。暫くして白太夫小脇差を三寶に乗せて櫻丸の前に置き、用意善くばと迫る。八重驚歎爲さん所を知らず。櫻丸乃ち初めて切腹せざるべからざるの所以を述べて曰く、われ姫君と齊世親王との文使となしたるより、讒者これを以て菅公に異心ありとなし、讒訴したるが故に此の度の災厄を蒙れるなれば、所詮生くべきにあらずと、八重道理に感じて止めも得ず、唯泣くのみ。白太夫、述懐して感涙萬斛櫻丸遂に切腹す。父白太夫念佛す。妻八重夫の刀をとり後を遣はんとする時しも梅王夫婦表より走り入りて之を止め、櫻丸の最期は天の命數なりと諭す。白太夫は菅公に隨はんとて後の事どもは梅王夫婦に托して旅立つといふ筋。

櫻丸は義として死せざるべからず。白太夫が親の慈悲として三扇の御圍の占も、菅公庭前の櫻の枯れしも、彼が死せざるべからざるの兆なり。彼や死すべき時に死せりといふべし。女房八重が夫と共に死せんと希ふ衷情亦殊勝なり。白太夫が齡八十を越え、千里菅公に隨ふ忠節に至つては眞に崇高の極なり。此の段一二軟弱の語あり惜びべし。

蘆屋道満大内鑑

狐別れの段

安倍の保名の留守宅へ、信田の庄司夫婦、一人の娘葛の葉を連れて來り、保名の門口に佇めば、機織
 の音の聞ゆるにぞ不審りつつ窺ふ。あらし思議や娘葛の葉に違はぬ女房あり。親子三人あきれ居る所
 へ保名歸り來る、互に挨拶ありて庄司は、許家の娘をつれて參りしとて保名に渡さんとす。保名希見
 の顔にて我先年危難のせつ、御娘に助けられ、當時より同棲して當年五歳になる阿部童子を得たり。
 機會あらば我不行跡を謝せんと存じつゝ今日に至れりと答ふ。庄司不審してあの機織る人は何人と問
 ふ。安名も不思議に思ひ、機屋を窺けば紛ふ方なき我が妻葛の葉なり。あらし思議やと呆然たるばか
 りなり。庄司曰くこれ離魂病にもあらざれば變化か所爲か。天狗の葉ならむといひ、娘を會はして實
 否を糺さしめんどいふ。安名曰く、否吾に術あり、暫く隠れて待たれよといひつゝ氣なき體に家に入
 り、今日庄司御夫婦に逢へり。夕刻には來宅すべければ其の用意せよといひて假睡す。葛の葉はあは
 れ今日が夫子の別なるかと童子に乳を與へ、眠れる夫に向ひ長々と哀別離苦の詞を殘し、童子に教訓
 して慟哭す。聲に安名及び庄司夫婦娘も共に駆け出して支へんとす。孤葛の葉姿を消す。四人は唯恍
 然たり。ふと見れば障子に「戀しくば尋ねきて見よいづみなる信田の森のうらみ葛の葉」といふ一首
 あり。安名、童子、慕うて呼べど叫べど返事もなし。かゝる所へ石川悪右衛門の家來三人、主の戀の

仇なりと罵りつゝ安名を捕へんと来る。安名孤の力を得て難なく三人を斃すといふ筋。荒唐無稽の敘述なれどもさまで害にもなるまじ。狐藁の葉今や去らんとして童子に教訓する件は、人の親として、人の子として心得べきこと多し、白狐が人間に化けたるは恩を報いんが爲なり。獸類だになほ恩に感ずるを示す點探るべし。

双蝶々曲輪日記 引窓の段

山崎南與兵衛元は八幡近在に於て郷代官の家筋なりしも身の放埒に役義を失ひ今や繼母と妻(元大阪新町の傾城都といふ)と三人暮にさびしき月日を送る中、再び出世の緒につきある日俄かに召されて參殿す。此の日濡髪長五郎編笠にて顔を隠し人目を忍びて訪ね来る。(長五郎は此の家の母の實子にして五歳の時他家へ養子に遣られしが養父母共に世を去り相撲となりしが男の意地より二人の侍を殺したればいつ捕はれ的身とならんも知れず一生の暇乞に母を訪ひしなり)母喜び迎へて二階へ通す、折柄與兵衛二人の侍を同道して歸宅し母と妻とを遠ざけ密談せり。此の二人の侍は長五郎が殺したる二人の侍の兄と弟と(密談の主要はその敵討の手にし)て日の中は二人の侍が詮索し夜に入りては與兵衛其の任に當るべしとなり。これを聞きし母と妻との驚は一方ならず、二階にありし長五郎は尙更ながら心中與兵衛に捕はれんと覺悟を定む。侍二人は辭して歸れり。妻おはや夫に向ひ切に罪人詮議を思ひ止まらんことを請ふ。母も亦與兵衛に向ひ罪人

の人相書を買はんと乞ふ。長五郎二階より覗き見れば手洗鉢の洗水に姿寫る、與兵衛目早く之を見たり。妻おはや敏くも引窓を閉づれば内は眞の闇となる。與兵衛心に決して人相書を母に與ふ。これ長五郎を助けん厚意なり。母妻共に謝す。折柄暮六つの鐘響きたれば與兵衛は詮議の時來れりどて、それどなく拔道を教へ家を駈け出づ。母と妻とは共に長五郎を落さんとす。長五郎辭して繩にかゝらむといふ。母或は怒り或は賤し且つ姿を變へんと長五郎の前髪を剃り落し高頬の黒痣を如何にせんとためらふ折柄屋外より聲あり、手裏劍を放つて長五郎の高頬に中て黒痣を去る。これ與兵衛の業なり。長五郎感極まり母に向ひ理をせめて自分を捕へ與兵衛に渡されんことを請ふ。母其の理に服し長五郎を引窓の繩もて縛し高聲に與兵衛を呼ぶ。與兵衛引窓の繩を斷つて引き立てんとすれば早や夜明の時刻なり。與兵衛曰く「我が役目の時は過ぎたり」とて長五郎を落し遣るといふ筋。

與兵衛、我が身の大功を棄て繼母の實子長五郎を助けんとする孝と義と、妻おはやが姑のために盡せる衷情とはどもに世道の教訓とすべく、長五郎が義として兄の繩にかゝらんとせるは俠といふべし。たゞこの篇花流の事に關するを以て第二種に收めたり。

出世太平記

本能寺の段

武智光秀、主君信永の居城本能寺を訪ひ、不興の詫に來り慇懃辭を申うして從軍せしめられんことと

乞ふ。然るに信永犬よ猫よと罵り足蹴に蹴飛ばし剩へ打擲苛責すること頻なり。光秀ますます謙讓す。信永尙も怒つて皐月の枝を以て擲つ。光秀その枝を執へ、花を瞻り、「時は今天が下しる五月かな」と詠する時しも寄太鼓、貝、鉦の音頻りなり。信永不審りて立つ。光秀悠然として曰く、かの物音は謀叛人の輩、此館へ寄せ来るなり。かくいふ我はその大將なりといひ放ち、信永に切腹を強ふ。折柄數多の茶坊主共駆せ來ると見之しが、皆光秀の廻し者にして信永を取り圍みたり。時しも注進ありて二條城信忠を討ち止めたりと報ず、信永無念の齒嚙をなし、「最前の一首は松永の謀叛に加擔して天下を望む汝が心底ならむ」と觀破す。光秀曰くかゝよき推量われ汝の命により松永を攻めて切腹せしめたるとき、始めて彈正は我父なるを知れり。かるが故に、われ父の謀叛を承繼し、その忘執を躰せんためのみと袂紗より父の鬪牒を出し、これを以て信永の頭を丁々ど擲つ。信永遂に自殺す。光秀これより装束を改め、華かに裝ひ連錢蘆毛の馬に跨がりて出で立つといふ筋。

此の段光秀の暴逆は、親の仇を報ゆるといふ根據あるものゝ如く作り成したるが趣向なり。然れども光秀の擧は逆事たるを免れず。さはれ信永が臣を遇する酷なりしは、彼が不幸を招く近因たりしは論なし。稽ふべきなり。

繪 本 太 功 記

妙 心 寺 の 段

逆賊武智光秀、多年の恨により、主君春永を討ち、妙心寺に砦を構ふ、光秀の母皇月、心平ならず、光秀の妻みさを、臣四王天田島守と共に慰む、皇月機嫌を直して奥に入る折柄、光秀歸館し直に母の機嫌を問ふ。母乞食の姿して出で、光秀に向ひ、「汝の弑逆我が家の名を汚す、渴しても盗泉の水を飲まずといへり。汝の如き逆賊と一所に居らんは神明の怒あれば、我はこれより乞食となり、世を渡らん」とて嫁、娘の止むるも聽かず出で行く。光秀故らにこれを止めず。これ母の意に逆はざらんが爲なり。後より軍卒をして御手道具を運ばしめ、已は一室に籠り辭世の句を残して自害せんとす。四王天田島守一子重次郎飛び継りてこれを止め、萬民のため暴悪の君を弑せしは天の爲す所なりと諫む。光秀自害を思ひ止まり、「われこれより繪旨を乞ひ受け、正義堂々と羽柴の軍と戦はん」とて、凜然として出で行くといふ筋。

母皇月が光秀に訓誠せる言々句々は、廉潔正義の心より送り出づる清血なり。光秀大逆と雖も、尙母の意に逆はざらんと焦心苦慮せる孝心は稱すべきものなしとせず。此段作者の筆は光秀に同情せる跡あり、探ると探らざるとは勿論讀者の自由なり。

大江山酒呑童子話

保昌館の段

元は田村是則の御臺有明御前に仕へし式部、今は矢香の里の黒木賣、風呂敷包を頭に戴せ、平井保昌

の館に至り、火急の願ありとて直談を請ふ。保昌出で、願の件を尋ねれば、式部曰く左大將に傷を負はしめ絶えて行衛知れざりし御臺様、この程在所へ参られ、自害遊ばされ、其の遺言により御首を持参したりとて風呂敷を解き器物を出す。これと同時に館の腰元小笹、同じく器物を持ち出で、これは此度吉野様(是則の孝和子様と共に御入來の土産物なりと言上す。保昌先づ式部が持参せし器物を開け、聞きしに違ひて空虚なり) (これわれ有明の身替にならんとする謀なり) 式部曰く御内檢の上は返答承りたしと通る。保昌次に吉野殿よりの土産物を賞翫せんと蓋を取れば、これも同じく空虚なり、(吉野も有明の身替にならんとする謀なり) 保昌何かに思ふ所ありて兩人に挨拶し、賤の女には休憩せよと命じ、左右に虚しき器を抱きて奥に入る。式部獨言して恨しきは吉野の前なり、有明様の行衛知れざるをよき事にして是則卿に付き添ひ、偽りかざる淺ましきよ、互に嫉妬なきやうにと、生子を取り替へ育てしと思へば無念なりと泣き沈む。然るに奥の間には吉野の前、御臺様の身替に我が首を討たれよと保昌に逼る聲聞ゆ。これを聽きて此の館に忍びし有明御前、吉野の好意に感じて切腹す。所へこれも館に隠匿はれし是則卿顯はれて、有明の死は嫉妬の果ならむと詰る。手負は恨めしげに、さらぬ仔細を語り、殊に一子般若丸我が躰の良からぬにや、悪心増長して出奔し、遂に大江山に入る。人の恐るゝ酒吞童子は即ち我が子なりと語る。人々驚く。是に於て吉野も懺悔して、我は直は人間にあらず、鈴ヶ山の鬼なり。往昔田村利仁卿に退治せられたれば其の根を報いんと美女と化し、田村の子孫是則卿に仕ふ

る中、朝ぼらけ有明の月と見るまでに、吉野の里にふれる白雪」と詠まれ給ひし和歌の徳に感じ、鬼の心も和らぎていつか邪念も消えたりしが、今御臺の詞の如く我が生み落せし般若丸、鬼の氣を享け酒呑童子となりしこと思へば淺ましき次第なりと語る。人々愈々驚く。是に於て有明の實子怪童丸、母と最初にして又最後の對面をなす。保昌夫婦烏帽子親となり、坂田金時と改名し源頼光に仕へて四天王の筆頭となるといふ筋。

御臺の侍女式部、是則卿の妾吉野の前相共に御臺の身替とならんと争ふ苦衷、一つは貞、然れどもあまり荒唐無稽に亘るの嫌あり

因云 この段朝ぼらけ云々の歌を引き、古今和歌集の序文和歌の徳を句はしめたる作者の趣向は、面白し。

酒呑童子話

渡邊屋敷の段

渡邊綱の屋敷へ、九條の里八文字屋より傾城小夜風多くの伴を連れて興入す。先妻半蔀は離縁せられ新嫁の側仕となる。目出度婚儀終りて小夜風は綱に向ひ羅生門の手柄話を聴かんと逼る。綱の一子小金丸勇ましげに語る。かゝる折柄主君頼光より火急の使ありて綱を召す。綱、羅生門に得たる鬼の腕を入れたる唐櫃をば小金丸に譲らしめて家を出づ。小夜風小金丸を懐柔して鬼の腕を見んといふ。小

金丸父の命もあり、且つ安部清明の申付もあれば見すまじと拒む。小夜風或は怒り、或は賤し、遂に
 小金丸をして唐櫃の蓋を開かしめ櫃に手を入れ、これこそ望む我が片腕よといひつゝ奥の間に駆け入
 る。さては變化の業なりしかと、小金丸後を追へども既に姿を消し去る。小金丸掌を握り、無念の涙
 と共に自害す。母半部駆け入りて取り縋り仔細を聞きて呆然たり。折から館震動して女關前の破風口
 を破り鬼神顯はる。奥の間より源五綱走り出づ。この刹那何處よりか白羽の矢飛び來りて鬼神の胸板
 を貫き斃す。折柄矢の主安部清明顯はれて鬼神に向ひ、娘よ善くも死せりと賞し、面をどれば以前の
 小夜風なり。人々不審に堪へずして仔細を問ふ。清明曰く我天文道にて之を悟る。源五曰くかく圖り
 しは帝の御爲なり、此の度大江山の酒吞童子退治の勅命、主君頼光に下りたれども虚空を飛行する鬼
 神を討つべき方便はなし、よりにて清明殿の陰陽道の秘法にて、正月元日に生れし男女の生血を酒に
 混合して咒文を行ひ吞ます時は忽ち鬼神の通力を失ふと聞く。我が子小金丸、傾城小夜風共に正月
 元日の生誕なれば命を請うて斯の計略、然かし小夜風が清明の子なりしは今始めてこれを知ると物語
 る。母半部聞いて愁歎す。手負の小金丸も亦忠死を喜ぶ。小夜風父子恩愛の涙あり。手負二人遂に瞑
 す。安部清明のはからひにて住居に小金丸の宮居を建つ。源五は一族及び領分には破風口を作らしめ
 ずと約す。かゝる所へ坂田公時如月姫の御供し庭前に駆け來り言上して曰く、我は源頼光様の家來
 なれども弱年なれば伊豆の山中にて修業中なり。昨日人身御供に捧げられたる姫君を助けて参りしと

綱、其の勇を賞し、一間に向ひ伯母人御望の鬼の片腕御覽に供へんといへば、伯母出で腕を見守る綱は死骸二人の毛髪を切りて火に入る。不思議や老母鬼に化し茨木童子なりと名乗る。これを見たる公時雀躍して童子を討留むるといふ筋。(次の段を参照せよ)

渡邊綱の一子小金丸の切腹は父に對しての申譯なければ面目を立つるための死なり。然もそれが父の計略にして忠義の死となりしと聞き喜んで眠する健氣さ、子供ながらに武士の倣あり。小夜風が一夜の夫たる綱のために生命を捧げんとする悲壯の行爲、又渡邊綱が勅命を拜せる主君源頼光に忠義を立てんと一子及び愛妾を犠牲とする慘憺たる衷情は、鬼神を泣かしめ、聴くものをして肉躍るの概あらしむ。唯小夜風の興入の件、妍かしき語あるを惜む。

酒 呑 童 子 話

源 頼 光 館

源頼光に二女あり。姉を如月姫といひ、妹を彌生姫といふ。姉は浦邊季宗の子綾助と契らん心あり。時の王子より二女の中何れかを迎へて妃となさんとし、臣鬼塚大學といふ者を遣はし、頼光の家に至り、之を擇ばしむ。茲に、頼光の夫人は後妻にして、妹は其の出なれば夫人心に思ふ様、若し姉を擇ばしめば、姉は綾助のために一命を棄つること明なり。姉の命を救はんため、我が實子の妹を擇ばしめんとして、一計を案じ姉妹の髪に牡丹花を挿し、妹の方には弱かに蜜を塗り置き、大學をして姉妹

の彈琴中、蝶の飛び來り牡丹花に止りし方を擇ばしむ。蝶果して妹の方に止まりしを以て、大學は妹を擇び復命せんとて歸る。賴光その眞意を知らず。唯妹の牡丹花に蜜を塗りありしを認めて淺ましき繼母の根性なりとて打擲す。妹も亦夫人の眞意を知らずして、母は姉を疎外する不良の心ありとて悲み切に母を諫め懷劍にて自害す。夫人泣きて眞意のある所を語りて謝す。賴光固より王子の謀叛あるを知るが故に、之と縁組するを欲せず。妹の死は却て王子と絶縁することとなるを喜び、妹の死を賞す。かゝる所へ綾助來りて曰く、かゝる凶事の因は我なれば我を殺されよと、賴光之を止め綾助が軍衛の奥義を極め居れるを知り、姉姫を娶はし浦邊季武と名乗らしむ。暫くして大學、王子の命により、妹姫の迎に來る。季武之を殺す。王子の隱目付女番信濃雉氷の荒童顯はれて曰く、予は表面は王子の謀叛に與すと雖も、實は賴光の御味方なり。故に此の出來事をば、大學は妹姫に不義を仕懸けし故、之を殺し妹姫は耻ぢて自害したりと詐りて復命せんと、賴光喜び玄蕃をして定光と名乗らしむ。定光喜び、大江山鬼退治には一番乗の功名せんとて季武と共に勇み立つといふ筋。

繼母が義理の娘の姉姫を救はんとせし所爲は、世のよき鑑といふを得ん。賴光が謀叛の王子に與せざる潔白は採るべし。其の他多く教訓を含まず、本段は初めの數枚に軟弱の語句あり。

和田合戦女舞鶴

三の切
市若丸初陣の段

先將軍頼家の妾腹に一子あり、善哉丸と呼ぶ。尼將軍之を僧とし鶴が岡の別當に預けしが、將軍實朝に子なきを以て萬一の場合には其の後を繼がしめんため、窃にわさりの與一、えがらの平太兩人をして善哉丸を奪はしめ、平太の子となして名をきんさんと改め、尼君及び平太の妻綱手と共にこれを守り、與一の家に匿る。話かはりてえがらの平太人を殺しより罪其の子きんさんと及ぶ。實朝、わさりの與一をしてきんさんの首を得よと命す。與一君命辭せんよしもなく其の子市若丸を向はしむ。心に思ふ所ありて忍びの緒の切れたる兜を著せしめ初陣に出で立たす。市若丸乃ち絶えて久しき母板額女にあひて、きんさんの討手に向へる由を物語る。母板額、市若の健氣なる武者振を熟視すれば兜の緒切れたり、板額心に不審りしが其の意を顯さずして尼君に向ひ、一子市若、きんさんの討手に参りたりと申す。尼將軍きんさんとを伴ひ出で、「きんさんは實は頼家の子にして、平太の子にあらざる旨を述べ、汝の夫與一、及び綱手の夫平太等と圖りてこの家に匿せしなり。請ふ善哉丸の命を助けよ」と板額はじめて夫の衷情を知りみづからをして市若を討たしむるなりと悟り、感慨に咽ぶ。垣の外には夫與一窺ひて共に涙を流す。市若丸は元より何事も知らざれば早く手柄をせしめてよと逼る。板額、心を決し隣房より計略を以て市若は眞は主殺しえがらの平太が子なる如く思はしむ。市若耻かしさに堪へかねて自害す。皆々驚き走り出づ。板額仔細を言ひ聽かせ、健氣なる切腹を褒め若君の御身替なりと語る。最前より表に忍びし父與一、垣の外より市若の手柄を賞す。市若さらば死するも手柄かど

莞爾として死す。市若の身替により助かりしは後に公曉を音に公曉といへる法師なり、板額女立つて市若丸の首を落し門前に向ひ、えがらの平太の子きんさとの首渡さんといふ。與一出で首を受取り寶朝の謁見に供へんと立ち出づといふ筋。

市若丸母に欺かれてえがらの平太が子なりと信じ、人殺しの悪名を受けたる者の子となるを恥ぢ潔く切腹したるは何等の義烈壯烈ぞや。あさりの與一が尼將軍に頼まれたる節を立てんと愛子を身替りにする衷情、察しやるだに一掬の涙を熱する能はず。然して板額女の苦衷に至つては到底筆舌の盡す所にあらず。但しこの項假設に過ぐる嫌なきにあらず。

平假名盛衰記

辻法印の段

梶原源太景季、父平三景時の勘當を受け香島の里辻法印の家に隠匿はる。仕送は悉く神崎の傾城梅ヶ枝より受く（この梅ヶ枝は前出逆櫓の段に顯はれた筆の妹なり）。源太遊所通ひの金に窮し今日も諸方を駈け廻りて不在なり。法印、女房と貧苦の話なぞせる所へ、お筆駒若君を樋口次郎に手渡しこの上は妹を尋ねて親の敵を討たんものと、この所を過ぎ辻法印の家に入りて妹の在家の占ひを請ふ。法印しかつべらしくお筆の口寫を其儘に占ひて遣る。所へ源太歸り來りよき儲仕事出來したり。それは義經公平家を一の谷に攻めんと明日未明に陣立と聞く。余もこの奸機を逸せず御供して功を立て親の勘當も宥

されたし。然るに鎧は傾城梅ヶ枝に渡し置けり。とを取らん爲めに登樓せざるべからず、されどこの紙衣一枚にては行き難し。依て一策を案じ尼ヶ崎、大物浦を駈け廻りて義經公の馬の飼料米麥大豆の差別なく辻法印の宅に持参すべし。軍終らば倍額にして歸さん。證文は武藏坊辨慶より下し置かるべしと觸れ廻りたれば、追付け百姓共茲に來らむ。差當り辨慶の役は法印に頼むと強ひて辨慶に扮装たせ、百姓を瞞着して一石餘りの穀物を得るといふ筋。後の世に至りても大物の浦に辨慶の借證文といふものありとかや。

源太の放埒風教上而白からざれども去りて大体よりさしたる害もなき語り物なり。劇の上より見るも唯々場賑かしに挿入せる段なり。

朝顔日記

濱松小屋の段

藝州福岡岸戸の家老、秋月弓之助の娘深雪、(朝顔の歌を唄ふより朝顔とも呼ぶ)戀人の後を慕うて家出し、様々の艱難辛苦を嘗め終に盲目の乞食となり、遠洲濱松に小家を作りて住居す。土地の腕白小供に苛まれ無念涙に暮るゝ時しも、深雪の乳人淺香、行衛を尋ねて國々を廻りこの所に來かゝりしが、深雪があまりに零落し且つ盲目となれるより、似し人と思ひて深雪の年頃、容姿、衣粧等を陳べてその人を尋ぬ。深雪は己を尋ぬる淺香なりと合點したれども、自分が零落の恥しさと、又名乗らば故里に連

れ歸られんことを恐れ、欺きて其人は淵川に身を投げて死せりと教ふ。浅香聽きて悲歎これを入しうす。やがて深雪に別を告げて立ち去りしが、何か心に思ふ事ありて立ち戻り、木蔭に隠れて様子を窺ふ。深雪は小屋を出で浅香の立去りし方を拜し謝罪し、述懐すること多時、浅香これを聞き泣て駈け出づ。深雪逃げんとせしが、浅香繩りつきて大に泣き深雪を説き、自分の親古部三郎兵衛が小夜の中にあれば暫く其處に行かんと誘ひ立たんとする時しも、わな拔吉兵衛といふ悪者、深雪の容貌を見て賣物にせんと捕ふ。浅香怒つて仕込杖を抜きて立ち合ひ遂に悪者を仕止めしかど浅香も深傷を負ひしかば、深雪泣く泣く浅香を脊負うて走るといふ筋。

乳人浅香の忠義と愛情、誰人もかくありたさものなり。深雪が一旦許したる戀人に對する貞節憫なるものあれども、原因が痴情の爲めに狂奔したる風教上の欠點あり。

生 寫 朝 顔 話

笑ひ薬の段

東海道島田の宿に最も繁昌せる旅宿あり。戎屋といひ此の屋の亭主は徳右衛門とて正直者なり。或る日逗留客の醫者、秋の祐仙といふ者、亭主を呼び、奥の客人は大内家の御用人ならむ、某の名を通じて一寸面會したしと傳言せしむ。やがて亭主の案内により岩城多喜太祐仙の座敷に来る。祐仙即ち密書を岩城に渡し、毒薬を以て岩城の相役忠臣の駒驛治郎左衛門を謀らんとす。祐仙乃ち茶釜に毒を投

す。始終の様子を窺へる亭主徳右衛門、祐仙が岩城の座敷に趣ける隙を窺ひ湯を替へて笑薬を入れ置く。暫くして駒澤治郎左衛門歸り来る。岩城、祐仙共に駒澤を迎へ、祐仙茶を饗せんとす。徳右衛門恐れながど座敷に出で、某敷代御出入の殿様の御家來方に萬一の事ありては徳右衛門の落度なれば誰ぞ毒味せらるべしといふ。岩城、祐仙大に怒りしが、理の當然に然らば自ら毒味せむ。但し事なき時は汝の首を得んといふ。徳右衛門諾す。是に於て祐仙先づ陰かに解毒劑を服し、濃茶を唯一口に喫し終る。やゝありて祐仙堪へぬまでに可笑しくなりて笑ひ出し止むる所を知らず。岩城は事の意外なるに驚き且つ怒る。祐仙益々笑ふ。徳右衛門は、かねて謀りし事なれば笑を忍ぶ。駒澤遂に事なきを得たり。兩人各々座敷に入るといふ筋。

此の段、岩城多喜太の奸計は、徳右衛門の働きにより水泡に歸したりといふを滑稽的に敘したる害なき喜劇なり。但し徳右衛門の深切は賞すべし。

道 中 龜 山 噺

在所の段

遠く龜山の家申石川源藏といふもの、舅、兵衛をば同じ家中の赤堀水右衛門に殺されしかば、主君に請うて敵討に出で、尾張國濱田の宿に又四郎といふ者を尋ぬ。これ、又四郎の娘は九年前石川の屋敷に奉公中、源藏と相馴れて懐胎しのこ在所に預けられ居ればなり。又四郎親子源藏の來來に氣も

そごろに喜び、孫力松を見せて喜ばしむ。源藏、親子の初対面をなし、成人を喜ぶ。又四郎力松の劍術上達を誇る。源藏その腕前を試みんと木刀を以て立ち合ふ。源藏は力松が右劍、左劍、八相無明、廣く諸流に亘れるを見て、この流義の師匠は我が尋ぬる敵、一光流の水右衛門(始めの名は濱田源八なるべしと思ふ)。途端に二階より覗く影、手洗鉢に寫るを見れば、案に違はず敵水右衛門なるより、思を替へて力松を散々に打ち据ゑ、親子の縁を切りかくらには、夫婦の縁を切り座を蹴立てて出で行く。二階にありて始終の様子窺へる水右衛門下り來りて又四郎に向ひ、只今の源藏、吾を敵と狙へば最早、茲にも居られまじ暇せん、といふを引き留め又四郎、親子の縁の切れし源藏差支あるまじといへば、水右衛門然らばといひつゝ裏へ忍び行く。かくらは我が子を引き寄せ、父の敵の水右衛門、師匠の恩はあれども親の恩に替へられねば、奥にある師匠を討つ覺悟はなきかと勧め、共に忍びて水右衛門を討たんとす。又四郎聞きて驚き水右衛門は我が爲には主筋なり。殊には織物き女子と子供、返り討は勿論なりと制すれども力松聽かず。尙も行かんとする刀を奪つて己の腹に貫通し、故らに大聲にてわお残念なり。かゝる小兒の手にかゝり死せんとはと叫び家計の人に聴かしめんとす。聲聞くより最前出でたりと見せて忍びし石川源藏、敵の片割れを討ち止めたる功あつばれ親子の縁を許さんといひつつ靜かに入り來り、又四郎に向ひ、敵の在家を知り得たるは汝の蔭なりと謝し、敵討は汝の好意に充じ一先づ延期せんといふ。又四郎謝す。又四郎家内を捜せども水右衛門は既に遁れて一書を残したり

見れば彼の在家を詐はる状なり。源藏水右衛門の在家は龜山なることを知り、一子力松を伴ひて敵討に出で行くといふ筋。

又四郎が孫力松の爲に一命を捨てて功を建てしむる義心、源藏も亦其の義心に感じて一旦敵の命を延べしむる義心は彼の義と此の義と互に相譲らざるものあり。此の段源藏が下女のおくらと通じたることを表白せり。これ風教上少しく如何はしき點なり。

時 代 新 薄 雪 物 語

鍛 冶 屋 の 段

刀鍛冶古今の名人、五郎兵衛正宗の弟子に吉助といふものあり。父を來國行といひてこれも名ある鍛冶師なり。若年の頃放埒のため親に勘當せられしが、父國行何者にか討たれたるより翻心して五郎正宗の弟子となり吉助と稱せり。正宗の娘おれん吉助に戀慕す。吉助おれんを介して鍛冶の秘法なる燒刃の湯加減を知らんと欲し、湯殿に密會を約す。吉助時刻を計りて湯殿に至りおれんを呼べども澁なし。不審に思ひ戸を排せば圖らざりき師の正宗入浴せり。正宗、吉助を見るや、火を焚けど命じ、良き加減と見るや吉助の手を取り湯船へ押し入れ秘密の湯加減を教へ、且つ吉助とは假の名、實は來太郎國俊ならむと觀破す。吉助畏つて素性を語る。正宗も昔を語り、「汝の祖父國吉に學びし舊恩を謝せるのみと」正宗に男子あり團九郎といふ。良心癡痺して惡黨に組し、親正宗に不幸なり。故に一子

相傳の秘密を團九郎に許さずして國俊に傳へたるなり。此日六波羅よりの詭にて、一振の刀を今日中に納めよと命せらる。乃ち正宗中央に座し天地四方に禮拜し左右吉助と團九郎に合鎧を打たしめ、今や焼双せんとする時、團九郎突然湯槽に手を差し込む。正宗即座に其の手を切り落す。人々驚く。團九郎大に怒りて父に反抗す。五郎正宗嚴として曰く「汝大膽及び澁川藤馬等の惡逆に黨し團邊、幸崎の両家を潰したる不届者め」と憤怒す。團九郎始めて己の非を悔悟し、善心に立ち歸る折柄、團邊左衛門、薄雪姫を負うて身を隠す。澁川右内後より追うて來りこれを捕へんとす。團九郎惡黨輩の謀叛を白狀す。茲に吉助なる來太郎國俊、團邊左衛門相共に六波羅へ訴へ親の敵を討たんと出發するといふ筋。

五郎正宗己の舊恩を報いんため、一つは娘の切なる望を達せしめんため、吉助に焼双の秘法を授けたる、一つは義、一つは愛、又團九郎が父の炯眼に服し翻然として善心に歸りしは世道の善き鑑といふべし。澁川右内が非業の最後を遂げしは懲惡のよき戒なり。憾むらくは段中軟弱の語句あるを以てこの部に收む。

姫小松子日の遊

俊寛島物語の段

俊寛清盛の暴辰により康頼、成經二人とくもに鬼界ヶ島に流されしが、二人は赦免せられて歸京し

俊寛一人、孤島に寂しき月日を送る中、再感卿の情により御懐胎の小督の局を守護する爲め救され、名を來現と改め、洞ヶ嶽の洞窟に匿る。或る日おやすといふ女、小べんといふ少女を連れて窟に來る、來現捉へて小督の局の御産を助けしむ。おやす心に思ふ所ありて來現の妻性を問ふ。來現語らす。おやす鏡の金打をして他言せずと誓ふ。來現おやすの眞心を知り、是に鳥物語をなし小督の局を守護するに至る次第を語る。小べん奥より駈け出で、來現に縋り「父上様なつかしや」と叫ぶ。來現不審に堪へず。おやす、さめくぐと泣き、自分は龜王の妻なりしこと、寛俊の子、徳壽君は男子なれば難あらんかと女子に化粧し養つて自分の子となしたりし事、奥様は歎きに暮れて自害あられし事等を物語る。俊寛右手に妻の戒名、左手には我が子を抱き懷舊の涙に咽びしが、氣をとり直し小督の局の介抱に立ち行くといふ筋。

此の段おやすの忠節を採るべし。他は唯憐れなる物語を敘したるに過ぎず。

八 陣 守 護 城

政清本城の段

加藤政清は幻君に忠節を盡し、幻君を推戴して北條時政と一戦し、四海を平定せんとし本城に據る。而るに、政清の子主計之助清郷は、時政に恩あるを以て時政に味方せざるべからず。時政は政清を味方につけんとし、其勸誘狀を主計之助に持たしめて父政清に到らしむ。政清怒りて之を寸裂す。又主

へのすけ 配耦の約ある雛絹姫は主計之助に逢ふを得て、始めは大に喜びしも、主計之助と雛絹の父とは敵同士となるを以て、主計之助より絶縁を迫られ、雛絹は遂に自害す。主計之助去りて後ら政清の軍師兒島元兵衛政次、出で来り、佐々木高綱等と協力して幼君を推戴し、時政を亡ばし四海を平定し且つ主計之助の安否を探りて両親達を安んせしめんと勇み立つと云ふ筋。

政清及び主計之助の忠勇、雛絹の潔白、親子の情愛、元兵衛の勇壯等教訓とすべさも雛絹の「父様や母様を思ふ案じは何所へやら」云々の句及「死る今まで一夜さも云々」の句軟弱なり。

白石後日譽

七郎兵衛内の段

宮城野信夫の姉妹首尾よく父の仇を報じ、遙々故郷に歸り伯父七郎兵衛の宅を訪ふ。七郎兵衛喜び迎へて種々に饗應す。宮城野絶えて久しき物語をなし姉妹して父の敵團七を討ちあはせたりと語るや伯父は雀躍して手の舞ひ足の踏む所を知らず、敵討の仔細を問ふ。姉妹は今日前に見るが如く詳細に語る。七郎兵衛聞きて且つ喜び且つ懐古の涙に咽ぶ。姉妹は旅の疲を癒さんと湯殿に行く。折柄所の役人手勢を引き連れ来りて今日此の家に來りし二人の娘に詮義の筋あれば引き立て行かんといふ。七郎兵衛驚きて理由を問へば曰く鎌倉表にて宇治兵部之助、橘の常悦(姉妹を助けて敵を討たしめくれし恩人)金井谷五郎(宮城野の計嫁)等將軍家を例さん謀叛露はれたればこれに縁ある宮城野信夫姉妹を召捕に

向うたり」と答ふ。七郎兵衛詮方なく領承して「今日は姉妹が亡父の命日に當れば彼等に回向せしむ
 る間暫時用捨ありたし」と請ふ。役人之を許し、七郎兵衛を人質とし小手をゆるめて羽がへじめとな
 して歸る。姉妹はかゝる事を少しも知らず、湯殿より出で来れば七郎兵衛心に思ふ様ありて俄かに姉
 妹を勸當せんと怒り箒を取つて打擲せんとすれど手は縛り繩の自由かなはず。姉妹はたゞ詫びに詫ぶ
 れど伯父聽かず、一間より西念和尚駆け出でなだめんとすれど尙聽かず。和尚は姉妹を連れて出で
 んどす。七郎兵衛再び箒を以て打たんとす西念之を遮らんとする途端七郎兵衛の両肩ぬげてむざんや
 伯父は縛繩の憂目にあへるを見たる姉妹は驚きどりつき仔細を尋ぬ。伯父は初めて役人の宣言を話し
 聞かすれば宮城野の驚き一方ならず。伯父にせめて難義を一身に引き受け姉妹を勸當して落さしめん
 どせる苦衷を語る。姉妹はありがた涙に暮れ互に死を争ふ折ふし、姉妹の奴實は淺倉内記といふ者入
 り來り姉妹が親の仇を報せじ孝心により命乞を申受けたりと報じ來る。宮城野信夫相共に黒髪を切り
 拂ひ父の菩提を弔ふといふ筋。

宮城野信夫姉妹の孝心、伯父七郎兵衛の慈愛、西念和尚の同情みな教訓とすべし。段中多少軟弱に
 渉る語句あるを以て最上の語り物とはなし難し。

蓮如上人御一代記

與三次郎住家の段

越路、吉崎の片ほとり、聚樂村といふ處に吉田與三次郎といふ百姓あり。元は日山の家臣なりしが、没落して貧苦に世を渡れり。妻お清は絲を繰りて家業を補く。夫婦共に熱神なる佛法信者なり。ある日吉崎に蓮如上人の説法ありとて講中の太郎作といふ者、お清を誘ひに来る。然れどもお清は姑お熊が強慾非道、殊に佛法嫌ひなるを憚りて行くこと能はず、あり合ふ綿を托して上人に喜捨せり。折柄姑の婆歸宅し、例の如く悪口雜言し剩へ冤をいひかけ折檻し、且つ無法にもお清を離縁したりとて門外に押し出したたり。お清屋外に流涕すること多時。時しも夫與三次郎歸りて此の有様に驚きしが表面妻を叱りてひたすら母に詫ぶ。老婆不機嫌のまゝ寢所に入れり。あとに、夫婦は談合し、竊かに蓮如上人の説法を聽かんと連れ立ちて家を出づ。一間に虚寢せる姑お熊は嫁お清を懲らしやらんと家に傳はれる鬼女の面をかつき頭髮を振り亂し白衣の形相物凄くあり合ふ銳鎌を持ちて後を追ひ吉崎の歸り路千束の村端の藪中に隠れ、お清の歸りを待つ。お清は上人の説法に渴仰の涙を流し稱名を唱へつ。今や此の所に歸り來る。あやしや路上に鬼女顯はれ、お清を喰ひ殺さんといふ。お清は金剛他力の信心篤く、自若として動する氣色なし。鬼女大に怒りてお清の頭髮をとつて引き倒しおとしの鎌を振り上ぐる途端、如何なるはずみかお清の肩先に突き立て、お清の悶絶せるを見てお熊は最早これまでと慘

酷にも胸板を貫き死骸を池中に投じて其の儘遁げ歸り、我が家に到りてかづきし面を取らんとすれど
も取る能はず尙も顔面にくひ入るばかりなり。

是に與三次郎はお清を先に歸らしめ今や我が家に歸り來る。お熊驚き慌てて押入の内に身を匿す、與
三次郎家に入りて妻を呼べど答なきに不審かる時しも大勢連にてお清の死骸を昇き込む。與三次郎の
驚愕一方ならず立ち寄りて、死骸を検すれば不思議や肌につけし連如上人自筆の名號は斜に切れたり
夫は此奇瑞に感じて女房の口中に温湯を入れるれば眼を開き蘇生す。これ全く六字の名號がお清の身替
となりしなり。此の様子を聽たる姑お熊押入の内より走り出で突然鎌を咽に突き立てたり。與三次郎慌
てて抱き止めんとせしが遂に及ばず。老母懺悔の物語をなし合掌して嫁お清に詫ふ。折から一間に連如
上人ありて六字の名號を喝へ給ふり不思議や顔にくひ入りし鬼女の面は除かれて罪障消滅すといふ筋。
與三次郎夫婦の孝行は以て勸善の資材たり。姑の最期は以て懲惡の材料となすに足る。たゞ此の段
荒唐無稽に涉り且つ慘酷の嫌あり

七 福 神 寶 入 船 藝 廻 しの 段

標題の如く七福神が正月元旦にそれく藝を盡して新年を壽くといふ筋。

風教上可もなく不可もなき語り物なり。